

100

ANNIVERSARY

長寿企業と共に、次の百年を

小樽市長寿企業表彰事業記念誌

100

ANNIVERSARY

長寿企業と共に、次の百年を

小樽市長寿企業表彰事業記念誌



北海道開拓の玄関口として栄えた我がまち小樽。

本州との人や物資の交流が盛んに行われ、港を中心に

ニシン番屋、石造りの倉庫群、運河などが

次々と造られてきました。

北海道で初の鉄道も敷かれ、

本州の金融機関が次々と進出しました。

ときは明治から大正時代。

この頃、小樽ではたくさんの工場や商店が産声を上げました。

水産加工品、船の部品や修繕、生活物資、食料品など

小樽の発展を支える工業や商業が開花の時を迎えていたのです。

市制百年を迎えた令和四年――。

人々の生活や社会環境は大きく変わりましたが、

小樽商人の熱意や努力は変わりません。

創業百年を超える長寿企業とともに、

小樽は次の百年に向かって新たな一歩を踏み出します。

目次

ごあいさつ	04
長寿企業のご紹介	05
記念式典	68
記念祝賀会	70
小樽市 産業の歩み	73





小樽市長寿企業表彰事業 記念誌発行に寄せて

小樽市長 迫 俊哉

このたび、本市の長寿企業として表彰させていただきました企業の皆様には、長きにわたり事業を継続し、本市の発展を支えていただきましたこと、心から敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。

本表彰事業は、小樽市制100周年を記念し、本市とともに100年以上歩んできた老舗企業のこれまでの功績を讃えるものであり、市内60社の企業を表彰させていただきました。時代とともに経営を取り巻く環境が大きく変化する中で、創業者の思いを受け継ぎ、100年という長い年月にわたって事業を継続することは容易なことではなく、本市にこれだけ多くの長寿企業があるということは大変誇らしく感じております。また、今後、皆様の背中を追ってさらに多くの長寿企業が本市に誕生することを期待しております。

昨年、本市は市制100周年を迎え、次の100年に向けて新たな一歩を踏み出しました。本市は人口減少や少子高齢化が進んでいることから、今後持続的に発展していくためには、居住地・観光地・投資先としての魅力を更に磨き上げ「選ばれるまち」

となることが重要だと考えております。長きにわたる努力や創意工夫によって、これまで本市を支えていただきました皆様には、引き続き本市の発展にお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

皆様におかれましては、現在、新型コロナウイルス感染症の長期化や物価高騰など様々な課題に直面していることと存じます。また、社会情勢や人々の価値観の変化、新しい技術の登場など、今後も経営を取り巻く環境は大きく変わっていくものと考えられます。そのような中で皆様が長い歴史の中で培ってきたノウハウや経験を強みに、様々な課題や変化に対応し、より一層躍進されますことをご期待申し上げます。

結びに、このたび表彰させていただきました皆様のみますのご発展及び関係者の皆様のご活躍とご健勝を心から祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

長寿企業のご紹介

大正十一年に市制が施行された小樽市には

百年以上の歴史を有する数多くの企業があります。

長年の功績に感謝し長寿企業として表彰すると共に、

ここに、歩みをご紹介します。

長寿企業一覧

◆ 有限会社 丸イ伊藤染舗	07
◆ 株式会社 カネツ渡辺商店	08
◆ モリカワ産業株式会社	09
◆ ナトリ株式会社	10
◆ 小樽市漁業協同組合	11
◆ ヘアーサロン・モトヤマ	12
◆ 株式会社 前堀	13
◆ 有限会社 寺山神佛具店	14
◆ ヘアーサロンタカハシ	15
◆ 株式会社 山谷建築店	16
◆ 小樽倉庫株式会社	17
◆ 有限会社 水昌堂	18
◆ ベヨ畑中機工株式会社	19
◆ 株式会社 新倉屋	20
◆ 株式会社 岩永時計店	21
◆ 医療法人 長谷川歯科医院	22
◆ 株式会社 山本工業所	23
◆ 株式会社 荒田商会	24
◆ 有限会社 本間木工品製作所	25
◆ 社会福祉法人 小樽育成院	26
◆ 曲イ田中酒造株式会社	27
◆ 有限会社 マルイ酒井鉄工所	28
◆ 小樽公衆浴場商業協同組合	29
◆ 株式会社 丸コ組	30
◆ 有限会社 矢崎工業所	31
◆ 有限会社 アイゼンイッテツ	32
◆ 株式会社 丸一土井水産	33
◆ 株式会社 丸い遠藤商店	34
◆ 株式会社 オオツカ	35
◆ 小樽板金工業協同組合	36
◆ 株式会社 新宮商行	37
◆ 宮井額縁店	38
◆ ザ・バーバー・オブ・ バーバースすぎたに	39
◆ 東豊工業株式会社	40
◆ 杉商株式会社	41
◆ 有限会社 入久三浦水産	42
◆ 有限会社 小町屋	43
◆ 澤の露本舗	44
◆ 株式会社 杉本運輸	45
◆ 理容マリモ	46
◆ 株式会社 岡島商店	47
◆ 株式会社 大八栗原蒲鉾店	48
◆ 有限会社 フレンド商会	49
◆ 飴谷製菓株式会社	50
◆ 有限会社 奥村松月堂	51
◆ 小樽船用品株式会社	52
◆ 医療法人 原田歯科医院	53
◆ 株式会社 大川鉄工所	54
◆ ホンダドリーム小樽 株式会社ホンダモーター金ヶ崎商会	55
◆ 株式会社 ミツウマ	56
◆ 河辺石油株式会社	57
◆ 北斗印刷株式会社	58
◆ 有限会社 山城屋生花店	59
◆ 有限会社 小樽大正湯	60
◆ 北海道信用金庫	61
◆ 北海道中央バス株式会社	62
◆ ホッカンホールディングス 株式会社	63
◆ 大ワ大和水産株式会社	64
◆ 柳川湯	65
◆ 有限会社 神仏湯温泉	66

※令和4年度「小樽市長寿企業表彰事業」にて表彰した企業のみを紹介しており、小樽市内の創業100年以上の企業の全てを網羅しているものではありません。
※創業年順に掲載しています。

商店を彩った手仕事旗 伝統を守りながら技術を継承

創業

1869年

明治2年



昭和27年頃の店舗



昭和3年夏の
伊藤染舗前
(花園第一大通り
の歩道にて)



大正10年～
昭和元年頃の
花園第一大通り

有限会社 丸イ伊藤染舗

手染めと現代技術の合わせ技

明治2年初代・伊藤與吉は愛知県から来道。旗章指物および、古着の悉皆屋を営み始めたことが当社創業の始まりです。明治27年、2代目芳太郎は札幌大火を機に小樽へ店を移転します。

以来、大漁旗工場として140年以上の歴史を有します。現在は堺町の元北酒連倉庫を改装し、店舗兼工場として営んでいます。代々受け継いだ昔ながらの手染めの技法と、現代のデジタル技術を合わせ持ち、染めものをはじめ、キーホルダー・Tシャツ・タオルなどのイベントグッズ、トロフィー・盾・メダルなどの記念品を製作しています。

後継者育成に力を入れる

当社はこれまで時代の変化に合わせ、柔軟に現代技術を取り入れてきました。平成27年にはUV印刷機、レーザープロッター、ガジェットプリンターを導入し、スマホケース・シヨップカード・キーホルダーへの印刷、彫刻、カットなどが効率的にできる体制を整えました。Tシャツなど布物への直接印刷も可能です。平成12年には伝統

技術を後世に伝えるために「NPO法人北海道職人義塾大学校」の立ち上げに参加し、「小樽職人」の後継者育成にも貢献しております。

今後も新たな発想、工夫、そして忍耐力を駆使してモノづくりの可能性を追求し、「価値ある仕事のナビゲーター」を目指していきます。

有限会社丸イ伊藤染舗

〒047-0027

小樽市堺町1番10号

【TEL】0134-27-2611

【FAX】0134-33-8333

【HP】<http://hataito.cho-chin.com>

●沿革

- 明治 2年 初代・伊藤與吉が悉皆屋を開業
- 明治 24年 2代目芳太郎小樽花園町に店舗を構える
- 大正 3年 3代目末吉小樽染物業組合結成
- 昭和 22年 4代目吉郎染色講習会で指導
- 昭和 37年 有限会社丸イ伊藤染舗 設立
- 昭和 56年 5代目一郎代表取締役就任
- 平成 27年 6代目晴竹代表取締役就任



代表取締役
伊藤 晴竹

これからも末永く 地域に愛される商店として

創業

1882年

明治15年

株式会社 カネツ渡辺商店



店舗外観(昭和10年頃)



小樽まつり(昭和20年頃の店舗前にて)



小樽で初バイクを購入、女店員が配達(昭和35年頃)



3代目久太郎と妻タカ(昭和27年)

一攫千金を夢見た初代

元治元年、石川県羽咋郡に生まれた渡邊久松が18歳のころ、一攫千金を夢見て北前船に乗り、商業で栄えた小樽に向かったことが当社の始まりです。秋田県沖で船が転覆するという困難に遭いながらも、久松は無事に小樽に到着し、雑貨や小間物を売る小さな店を構えました。その後、経営が軌道に乗り奥澤村に大きな店舗を構え株式会社を設立。石川県より建材を運ばせ、より丈夫な建物にしたそうです。昭和29年、昭和天皇が北海道行幸で小樽を訪れた際には、市からの注文でパンを用意することになり、平野製パンに特別上等な食パンを焼いてもらい宿泊先にお届けしたところ、大変お気に召していただいたと聞いております。

店舗を絞り地域に根づいた商店に

また、昭和30年代には、北海道コカ・コーラボトリング株式会社の社長と協力し、コカ・コーラの魅力を伝えようと、高校を訪れ試飲などのイベントを行いました。その努力が実り、小樽の若者にコカ・コーラの美味しさが広まりました。同社の社長は店を訪れ、「小樽市のコカ・コーラ人気は

潮音頭のリズムのごとく市民の心を虜にした」と4代目社長信夫と楽しそうに話していたそうです。昭和の中ごろには、洋食レストランや居酒屋などの多角経営をしていた時期もありましたが、現在は酒、タバコ、雑貨などの販売を1店舗で行っています。今後も地域のみなさまに愛されるように、長く続けてまいりたいと思っております。

●沿革

- 明治15年 初代・渡邊久松が小樽へ渡り父・恒右エ門の名義で小売店開業
- 明治24年 株式会社設立。代表者が恒右エ門から2代目久松へ
- 大正 8年 代表久太郎就任
- 大正12年 店舗拡大のため現在地へ移転
- 昭和35年 4代目代表取締役信夫就任
- 昭和47年 レストラン開業。以降居酒屋なども経営
- 令和 3年 代表取締役社長洋子就任

株式会社カネツ渡辺商店

〒047-0013
小樽市奥沢1丁目20番6号
【TEL】0134-33-5533
【FAX】0134-33-5533



代表取締役社長
渡邊 洋子

漁網製造販売から営業内容を拡大 お客様の要望に応える総合商社に

創業

1883年

明治16年

モリカワ産業 株式会社



森川増次郎商店登録票 (昭和2年頃)



昭和19年の出資証券



森川商店登録票 (昭和23年頃)



森川魚網染料製造所登録票 (昭和23年頃)

漁網販売部と製造部を法人化

当社は、定置網やカゴなど漁業資材の製造、加工、販売を主とした海洋・漁業の関連会社です。初代・森川増次郎が滋賀県から小樽へと渡ってきたのが、明治16年。そのときは呉服店を営んでいたようですが、明治37年には漁網を中心に漁業関係資材の製造販売を始めます。明治41年には2代目清次郎が、山田町の山田小学校を買収、漁網工場を建設します。亜麻燃糸、亜麻漁網などの製造販売を行っていました。しかし、その後工場が火事で焼け、新たな工場を緑町に新設します。昭和23年には、販売部門を株式会社森川商店（堺町）に、漁網製造部門を森川漁網株式会社（港町）として発足させます。

保険や食、住宅へと事業を広げる

その後は釣り具関係の小売業や、各種保険の代理店業、新巻鮭・すじこ・いくらなど道内名産品産地直送販売など新規事業に積極的に参入。昭和53年にはオタルアツミ株式会社を設立し、建築資材や住宅設備資材の販売も行うようになります。平成になるとグループ会社5社を企業合併。現在の

モリカワ産業株式会社となりました。

当社はこれからもあらゆる可能性を追究、柔軟な発想と行動力を持って、新しい技術や商品の開発に邁進し、お客様のご要望に誠実に応えられる総合商社として進んでいく所存でございます。

モリカワ産業株式会社

〒047-0027

小樽市堺町2番10号

[TEL] 0134-33-4101

[FAX] 0134-33-4106

[HP] <https://big-morikawa.com/>

●沿革

- 明治16年 初代・森川増次郎が滋賀県より渡道。呉服店を営む
- 明治37年 漁業関係資材の製造販売を開始
- 昭和 2年 2代目清次郎が増次郎を襲名継承する
- 昭和23年 3代目正七が代表取締役社長に就任
- 昭和47年 4代目正一が代表取締役社長に就任
- 令和 2年 5代目令が代表取締役社長に就任



代表取締役社長
森川 令

積み上げた信頼と技術 全道の街づくりに建設資材で貢献

創業

1884年

明治17年

ナトリ株式会社



小樽本店 (年代不明)



金像印シヨベル看板
(特約店に配布された看板)



小樽で電話が
開通した際の
番札

創業者 名取高三郎

金物行商から店を持つまで

初代・名取高三郎は安政5年、山梨県の貧しい農家に生まれました。高三郎は困窮を抜け出そうと、北海道の金物業の草分け的存在である叔父・今井喜七に従って金物商に精を出すようになります。明治8年、新潟で仕入れをして船で小樽へ初上陸。以来、ニシン漁でにぎわう漁場などに鋸類を売り歩き、春先には新潟から小樽へ渡り、秋口には山梨へ帰る行商生活を送っていました。よく店を守り商売を伸ばしてきたことから、喜七は店を一切、高三郎に任せることとし、明治17年に「㊤名取高三郎商店」を創業する運びとなりました。

各種建設資材の販売を行う

北海道の開拓事業とともに発展した小樽で基盤を作り、明治末から第2次大戦開戦までにはセメント販売事業に進出。戦後の高度成長期から円高不況時までの弊社成長期には札幌に本社を移転し、セメント生コンのみならずガラスサッシや鋼材も併営する建材の総合商社として全道に販売網を展開するに至りました。その後、平成20年には太平洋セメント株式会社の連結子会社と

なり、現在は札幌本社ほか4事業所体制を敷き、主に旭川を含む道央および道南地域で太平洋セメントグループの製品を主力として、各種建設資材の販売を行っており、今後も歴史に裏打ちされた信頼のもと、北海道の発展に貢献してまいります。

ナトリ株式会社

〒047-0031

小樽市色内1丁目1番8号

【TEL】0134-22-0001

【FAX】0134-22-6000

【HP】<https://natori-co.jp/index.html>

●沿革

- 明治17年 ㊤名取高三郎商店創業
- 明治33年 色内町に店舗・倉庫を新築
- 昭和35年 株式会社名取商店に改組
- 昭和38年 本社を札幌に移す
- 昭和46年 本店所在地を小樽から札幌に変更
- 昭和47年 ナトリ株式会社に改称
- 平成24年 本店所在地を札幌から小樽に変更



代表取締役社長
生田 考

小樽の漁業を円滑に推進・発展 質の高い海の幸を全国に届ける

創業

1886年

明治19年

小樽市 漁業協同組合



製氷冷凍工場（2階事務所併設）操業開始（昭和28年）



婦人部会結成（昭和32年）



初代組合長理事 村田為吉



祝津沖において初のホタテ貝の天然採苗・中間育成の試験事業に着手（昭和54年）

相互扶助から生まれた発展

当組合は、明治19年「小樽郡漁業組合」（銭函から堺町まで）と「高島郡漁業組合」（色内から祝津まで）が設立され、明治24年両組合が合併し「小樽高島両郡漁業組合」となり、業務を開始したことに始まります。その後、中小の組合と吸収合併を繰り返して、昭和24年「小樽市漁業協同組合」となり業務を開始します。昭和28年には製氷冷凍工場の建設に着手するなど、市場と製氷冷凍工場を中心に事業を推進する体制を整えました。昭和41年には「小樽市忍路漁業協同組合」と合併し、現在に至ります。

小樽の漁業を未来に繋げる

当組合は北海道の日本海側中央部に位置し、小樽市一円の海岸線を有しています。海岸の形状は、砂地、岩礁、転石と変化に富んでおり、四季折々に40種類以上の魚介類が漁獲され、市内外・道外へと広く流通されています。また、漁業資源を維持するため、ニシン、ヒラメ、サケ、サクラマスなどの稚魚、ウニ、アワビ、ナマコの種苗放流などを行い、資源管理型漁業の確立に取り組んでおります。漁業を取り巻く環境が大き

く変化する中、当組合は基本理念である自主・自立、相互扶助、大同団結の精神を基に歩んできました。そして新しい時代の適切な漁業秩序を確立し、担い手育成とともに漁業者一人ひとりの経営安定、健全な組合運営を目指しています。

小樽市漁業協同組合

〒047-0031
小樽市色内3丁目5番18号
【TEL】0134-22-5133
【FAX】0134-22-5173
【HP】<http://jf-otaru.jp>

●沿革

明治19年 小樽郡漁業組合と高島郡漁業組合設立
明治24年 両組合合併。小樽高島両郡漁業組合開始
昭和24年 小樽市漁業協同組合として業務開始
昭和28年 製氷冷凍工場と事務所の建設に着手
昭和53年 祝津漁港完成
平成 5年 塩谷漁港完成
平成 7年 新市場兼総合事務所竣工



代表理事組合長
嶋 秀樹

親子4代バトンをつないで136年 本山家が守ってきた理容店

創業

1886年

明治19年



明治後期の店舗



創業者 本山清吉 2代目 本山玉吉 3代目 本山志良



賞状 (明治43年)

ヘアサロン・
モトヤマ

市民が憧れる存在の店

石川県で家族が床屋をやっていたと聞く、初代・本山清吉が小樽に渡ってきたのは明治19年ごろ。当時小樽で化粧品などを扱う小間物屋として成功していた、親戚関係の村住家を頼って手宮に移住したのが創業の始まりです。清吉は色内1丁目運河公園近くに「明治軒」を開業。しかし大火に遭い、明治後期、2代目玉吉は清吉とともに駅前中央通り色内1丁目に移転し、店名を「本山理髪館」としました。当時、小樽のどこの理髪店にも住み込みの従業員がおり「本山理髪館」にも玉吉と清吉のほか5〜6人の従業員を雇って住まわせていました。常連客には街の偉い役人の方々も多く、出世を望む男性たちに「自分もいつかは本山で調髪してみたい」と言われるほどだったと聞いています。

4代目慶三が継承して61年

昭和になり3代目志良は父の玉吉、叔父の幸吉と従業員をかかえ、改名した「本山理容所」を経営。終戦後のエピソードとしては、アメリカ兵が今でも店で使っているドイツ製の鏡が気に入って2枚持ち帰ったという話です。

ヘアサロン・モトヤマ

〒047-0031
小樽市色内1目6番23号
【TEL】0134-23-5454
【FAX】0134-23-5454

●沿革

明治19年 初代・本山清吉が明治軒開店
明治後期頃 2代目玉吉が清吉とともに色内に移転し
本山理髪館に改名
昭和12年 3代目志良が玉吉とともに本山理容所
に改名
昭和38年 4代目慶三がヘアサロン・モトヤマ
に改名



店主
本山 慶三

昭和38年に4代目慶三が店を継承。3代目志良には息子が3人おり、長男・次男は有名大学を卒業後一流企業へ就職。3男の慶三が跡を継ぐことになりました。慶三は、代々取り組んできた北海道理容衛生生活同業組合小樽支部の活動においても、現在も監査役を務めております。ここまで続けて来られましたのも、ご先祖とお越しいただいたお客様ののおかげと感謝申し上げます。今後とも精進して参ります。

繁栄と淘汰の時代に柔軟に対応 街を支える老舗鋼材商

創業

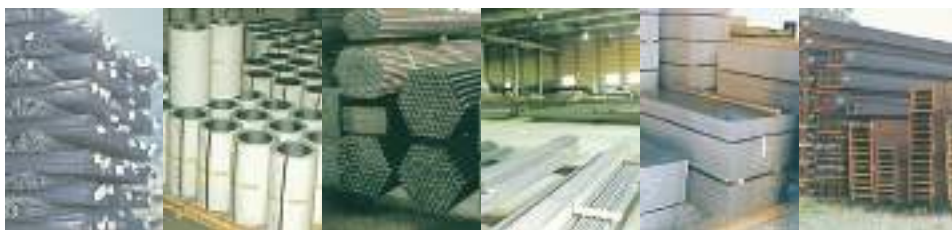
1888年

明治21年

株式会社 前堀



営業願 (明治21年10月)



現在の主な取扱商品

築き上げた確かな経営基盤

富山県から移住してきた初代・堀岡長二郎が、明治21年、港町にて銅器商を創業したことが当社の始まりです。現在は主に鉄鋼、鉄鋼一次・二次製品、カラートタン、各種線材などを扱う鉄材卸売企業です。鉄鋼業界が「鉄は国家なり・産業のコメなり」といわれ王道を歩んだ時代、そしてバブル崩壊後、重厚長大が過去の遺物と化した時代、当社もこれら幾多の変遷と共にあり、今日の経営基盤を確立してまいりました。小樽市の本社と営業所のほか、札幌、旭川、室蘭と4つの重要都市に拠点を構え、道内全域の鋼材ニーズに 대응しております。

地域の需要に素早く応える

当社の大きな特色として、支店全ての倉庫に在庫を持ち、自社便による迅速な配送体制を敷いていることがあげられます。かつては一般的だった鋼材卸売業者による自社配送も、現在そのようなサービスを提供する会社は減少傾向にあります。自社便配送は、各支店が地域のお客様に密着したきめ細かなサービスを提供することができ、今では600〜700社の得意先様から支

持を頂いております。創業以来一貫してお客様本位のサービスに徹してきた当社は、平成30年には130周年を迎えることができました。先代が築きあげた暖簾に安住することを現に戒め、これからも北海道の発展と共に歩み続ける所存であります。

株式会社前堀

〒047-0031
小樽市色内3丁目9番8号
【TEL】 0134-22-4171
【FAX】 0134-22-4105

●沿革

明治21年 初代・堀岡長二郎が銅器商を創業
明治30年 前堀銅鉄合資会社を設立
大正13年 前堀商店に改組
昭和15年 有限会社前堀商店に改組
昭和30年 株式会社前堀商店に改組
平成 7年 資本金10,000,000円
平成21年 株式会社前堀に商号変更



代表取締役
佐藤 優

気軽に立ち寄りたくなる 神仏具店を目指して

創業

1889年

明治22年



昭和52年に改装するまでの店舗



堺町での起業時の店舗

有限会社 寺山神佛具店

堺町から丸井今井の向かいに出店

寺山神佛具店は、長年小樽の地に根ざした店として地元の方々に親しまれてまいりました。創業は明治22年。初代・寺山仁三郎が「寺山商店」という名前で堺町に店を開いたのが始まりです。当時は、仏壇、仏具以外に漆器も扱っていたと伝えられています。その後、稲穂町の丸井今井小樽店の向かいに出店（昭和2年）。稲穂町は、商業施設やサンモール一番街のおかげで小樽の中心街として大いに賑わっていた場所。丸井今井小樽店はその中心的な存在でした。現在の店舗は、この当時のもので、95年を超える建物となりました。

線香は道内一の品揃え

昭和12年には、北海道開拓70年を記念した北海道大博覧会が小樽花園公園や海岸埠頭で開催されました。当店も仏壇を出品させていただき、小樽の産業の一翼を担う店として広く知っていただくことができました。昭和52年には店舗を改装。当時の趣を残しながら、明るく現代的な店舗に生まれ変わりました。

現在の当店は、線香の品揃え道内一を目

指し、どなたでも気軽に立ち寄りいただけるような店舗づくりに努めております。今後も地域の皆様とともに、長い歴史を未来につなげていきたいと考えております。

有限会社寺山神佛具店

〒047-0032

小樽市稲穂1丁目3番地7号

【TEL】0134-23-0366

【FAX】0134-23-9188

●沿革

明治22年 初代・寺山仁三郎が堺町にて起業
大正12年 稲穂町に丸井今井小樽店が移店
昭和 2年 丸井今井小樽店の向かいに出店
昭和12年 北海道大博覧会に仏壇を出品
昭和52年 店舗改装、現在に至る



代表取締役
寺山 善明

131年続く伝統の技術とサービス 遠くから常連客が通う老舗

創業

1891年

明治24年



昭和30年頃(3代目一央の妻アサ子)



昭和54年頃



創業者 高橋熊五郎
(大正5~7年)



現在の店内

ヘアサロン タカハシ

亀甲床から高橋理容所に

初代・高橋熊五郎が量徳(現潮見台)に「亀甲床」を開業。熊五郎は大正15年に亡くなり、昭和2年、2代目熊市が入船に店舗を移します。3代目一央はシベリアから帰還後、株式会社ミツウマ理容部を営業していましたが昭和20年、熊市が亡くなりその後、入船の「亀甲床」を長橋に移転することになったことを機に株式会社ミツウマ理容部を退職。一央、一央の弟、住み込みの職人たちとともに「高橋理容所」を開業します。4代目の私は神奈川県厚木の理髪店で修行しながら、1年間、新宿の理容学校へも通いました。父の一央が店で倒れたのが平成元年。店を引き継ぐにあたり現在の名前に変更しました。

これからも夫婦で現役を続行

平成5年、道路拡張にともない店舗を道路向いに移転。以来30年近く、親子代々、長くお付き合いのある常連客の皆様にご愛顧いただいております。苫小牧や倶知安など道内各地、また東京にお住まいで、小樽へ帰ってきたとき必ず寄って下さる方々の

ためにも、長く妻とともにこの店を守っていかうと思っています。また理容業界では、北海道理容生活衛生同業組合小樽支部の区長や後志地区会長なども務めさせていただき、現在は道本部の理事も兼務しております。引き続き、北海道の理容業界のためにも働き、貢献していきたいと思っております。

ヘアサロンタカハシ

〒047-0036
小樽市長橋2丁目18番11号
【TEL】0134-23-4414
【FAX】0134-23-4414

●沿革

明治24年 初代・高橋熊五郎が亀甲床を開業
昭和2年 2代目熊市が入船に移転開業
昭和24年 3代目一央小樽ミツウマ理容部にて営業
昭和30年 3代目一央現在の場所に高橋理容所開業
昭和63年 4代目一之がヘアサロンタカハシに改名し現在に至る



店主
高橋 一之

小樽の歴史的建造物施工に参加 先代が築いた暖簾を守り続ける

創業

1892年

明治25年



創業者 山谷文吉



契約証(大正14年)

株式会社 山谷建築店

小樽繁栄の代表建築に従事

創業者である山谷文吉は滋賀県より来樽し、山谷家の養子として入籍。滋賀県人会より発注される建設工事を受けて、明治25年に屋号を「みつわ山谷」とし、事業を起しました。

その後2代目興吉が事業を継承し、大正13年に3代目憲二に交代した後、昭和初期にオタモイに巨大リゾート施設「オタモイ遊園地」が誕生。その中核施設として断崖絶壁に建てられた高級料亭「龍宮閣」の建設に弊社が関わったと先代から聞いております。またそのほかに、昭和11年に設立された小樽保証牛乳株式会社事務所で、歴史的建造物に指定されている「小樽ミルク・プラント」や、北海道最古の料亭「海陽亭」施工にも関わったと伝えられております。

地域の建築・修繕工事を担う

現在は5代目となり、土木一式工事、建築一式工事、大工工事、とび・土工・コンクリート工事を中心に営業を続けております。長橋中学校屋内運動場の耐震補強ほか改修工事や、市営住宅外壁等改修工事、小樽年金耐震改修工事など、地元の公共施設

や民家の修繕工事などの実績があります。今後は経営効率化を進めるとともに、地域に根ざした企業として御愛顧いただけるよう、努力してまいります。

株式会社山谷建築店

〒047-0021
小樽市入船2丁目11番7号
【TEL】0134-24-0251
【FAX】0134-27-3885

●沿革

明治25年 初代・山谷文吉、建築工事業を開業
不 明 2代目興吉が事業を継承
大正13年 3代目憲二が事業継承
昭和24年 株式会社山谷建築店設立、憲二代表取締役就任
昭和48年 4代目憲太郎取締役就任
平成29年 5代目憲弘代表取締役就任



代表取締役
山谷 憲弘

運ぶ・預かる「タルソー」 物流会社として小樽から全国へ

創業

1893年

明治26年

小樽倉庫

株式会社



小樽倉庫開業式<明治26年11月12日>



創業者の5代目西谷庄八(前列中央)と
11代目西出孫左右衛門



会社設立広告

北海道初の法人倉庫

当社は、さまざまな商品を輸送・保管する物流会社です。前身となったのは北前船主西谷家5代目西谷庄八が、小樽に出先として明治23年に設立した「西谷支店」。その3年後に、同じ石川県出身の西出孫左衛門とともに「小樽倉庫株式会社」を創業しました。創業時には600坪の倉庫が完成し、盛大に開業式が行われた様子が写真に残っています。明治28年には設立登記を申請し道内企業として第1号の倉庫会社として認可されました。当時の石造りの倉庫は、現在小樽市の歴史的建造物として保存され、市立博物館や物産館として再利用され、観光客も親しまれるスポットとなっています。

信頼に応える輸送・保管業務

長らく小樽で倉庫業を中心に仕事をしておりましたが、お客様のニーズの変化に合わせて昭和33年「中央トラック株式会社」を設立。昭和35年、札幌営業所を開設したのを皮切りに苫小牧、東京、帯広、大阪、福岡と支店営業所を全国に配置。地元の輸送業者と契約を結び、現在は全国的な物流ネットワークで貨物の輸送代理業務と商品

の保管業務を行っています。

物流を中心とした企業活動を通じ、環境問題にも積極的に取り組んでいます。環境マネジメントシステム(EMS)の国内規格「エコステージ」の取得などサステイナブルな社会の実現に貢献しております。

小樽倉庫株式会社

〒047-0007
小樽市港町5番3号
【TEL】0134-23-8161
【FAX】0134-33-3009
【HP】<http://www.taruso.co.jp>

●沿革

明治26年 西谷庄八・西出孫左衛門らにより創業
明治37年 山本久右衛門が買収。2代目代表取締役
大正13年 港町地区に小樽新庫1、2番を建設
昭和19年 国家総動員法により小樽合同倉庫設立
昭和58年 本社を現在地へ移転
平成31年 6代目代表取締役山本みゆき就任



代表取締役
山本 みゆき

昔懐かしい味の和洋菓子を 花園銀座3丁目商店街の老舗

創業

1894年

明治27年

有限会社 水昌堂



現在の店内



店内に飾ってある創業当時の額



戦後からある水昌堂の看板
(現在は商品は置いていない)

餅屋から菓子屋へ

「水昌堂」のもとの始まりははっきりわかりませんが、初代・佐々木重三郎の姉が、市内で餅屋を営んでおり、弟の重三郎が跡を継いだように聞いています。場所は花園ではありませんでしたが、グリーンロードから現在の場所へ移転しています。そして重三郎の跡を継いだのが、甥っ子だった2代目足田秀夫でした。秀夫は食べることが好きで、研究熱心。昭和初期にはすでにスイートポテトを出していました。息子の私は東京の製菓学校で洋菓子を学び、東京の洋菓子店に就職。修行を経て小樽へと戻り、店に入りました。

銘菓「ゴロダの丘」を考案

昭和40年ごろに、佐々木家から店の権利などを譲り受け有限会社に改組。秀夫と二人三脚で店を守ってきましたが平成21年に秀夫が亡くなり、3代目として勝裕が店を引き継ぎました。

品ぞろえの7割を占める和菓子は職人が作っており、くりまんじゅう、どらやき、べこ餅など、どれも懐かしい味です。そして商品の3割はロールケーキやプリン、

アップルパイなど洋菓子を置いており、バタークリームを使った昔ながらのケーキもあります。私が考案した銘菓「ゴロダの丘」は伊藤整ゆかりの地・文学碑がある塩谷のゴロダの丘に由来するお菓子です。現在は、札幌で和菓子の修行をした息子の昌之と共に、小樽の皆様には和洋菓子をお届けしております。

有限会社水昌堂

〒047-0024
小樽市花園3丁目3番2号
【TEL】0134-22-2894
【FAX】0134-22-2894

- 沿革
- 明治27年 初代・佐々木重三郎が姉から店を引き継ぐ
- 昭和30年頃 2代目足田秀夫が店を引き継ぐ
- 昭和40年頃 有限会社に登記
- 昭和55年頃 足田勝裕が店に入る
- 平成21年 3代目勝裕が代表を引き継ぐ
- 平成27年 昌之が店に入る



代表
足田 勝裕

古物商問屋から殺菌装置開発製造まで 時代に合わせて柔軟に対応

創業

1894年

明治27年



社名を「烟中鉄店」と改名し事業展開（昭和12年頃）



北海道商工人名録小樽之部（明治44年）

メヨ烟中機工 株式会社

始まりは古物商問屋から

当社はボイラー・圧力容器の製造メーカーとして長年培ってきた技術により、食品加工用の高圧殺菌装置を設計・製造・販売しております。その始まりは明治時代。

初代・烟中與三次郎は、石川県月津村の店主・烟中三次郎の弟として分家し北海道に渡り、色内町で「メヨ烟中與三次郎商店」を創業しました。当時は古銅鉄・古物商問屋でした。昭和初期には與三次郎の娘婿、2代目周太が、昭和11年には周太の妻りんが3代目を受け継ぎました。4代目衆多は屋号を「烟中鐵店」に改名。古鉄、原動機械製造販売設置、ボイラー販売を始めて昭和23年に法人化。現在の基礎をつくりました。

ボイラー圧力容器から 発展した製品群

衆多はボイラー製造を発展させ、自社ブランドのHK堅型ボイラーを開発。昭和40年代には農水産加工業の缶詰製造に合わせて缶詰用殺菌装置を開発。昭和50年代には、レトルト食品の普及にとまないパウチ包装の殺菌装置や、現場で簡単に使用できる可搬式ボイラーユニットハウスなどを次々と

手がけました。5代目の私はお客様のニーズに合わせて、ペット用の火葬炉や魚醬・果汁の油圧搾り機、カズノコ塩抜き用の水切り台車など先代から引き継いだ技術をもとに創造性を発揮。多種多様な製品開発を行い地域に貢献しております。

また、管工事を主体とする設備工事を合わせて行っています。

烟中機工株式会社

〒047-0031
小樽市色内2丁目15番6号
【TEL】 0134-25-2280
【FAX】 0134-25-2284

- 沿革
- 明治27年 初代・烟中與三次郎がメヨ烟中與三次郎商店創業
- 昭和11年 3代目りんが営業を受け継ぐ
- 昭和12年 4代目衆多が烟中鐵店に改名
- 昭和23年 烟中機工株式会社として法人化
- 昭和45年 烟中機工株式会社に改名
- 平成10年 5代目俊朗が事業を受け継ぐ



代表取締役
烟中 俊朗

花園だんごで大ブレイク 創業127年を超え今なお成長中

創業

1895年

明治28年

株式会社 新倉屋



花園だんご



「石倉くるみ餅」
小樽にちなんだ
ネーミングの商品が
多数あります



花園本店店内



「雪明かりの路」
元々は伊藤整文学賞
記念銘菓として誕生。
2018年に商品をリニ
ューアルしました

こだわりの団子が名物に

創業当時は「丸サ大阪屋」の屋号で、米、味噌、醤油などを扱う食料品雑貨店でしたが、色内大火により罹災。今の本店がある花園に移転後は、駄菓子などを扱っていたと伝わっています。元々明治の頃から花園公園で販売されていた「花園だんご」を、当社で製造し始めたのは昭和11年のこと。2代目慎太郎が100%国産うるち米を使用した団子や「山型一刀流」と名付けたオリジナルの餡の盛り方を考案した団子を作って販売したところ、これが大人気となり、当社の看板商品となりました。地元の方々ははじめ観光客にも親しまれ、令和4年には創業127年を迎えました。

新旧の和菓子を製造・販売

さらに、高度経済成長期に入った昭和30年代には、全国菓子大博覧会で「花園だんご」が最高賞を受賞したほか、本店に設けた喫茶部が一世を風靡するなど、広く「花園だんご」と「新倉屋」の名を広めることになりました。

今日では屋号を「小樽新倉屋」と変更し花園本店、総本舗・本社・工場、駅前店の

3拠点でさまざまな菓子を製造・販売しています。当社の使命は「温故知新」「創業の志」を忘れず、地域に根ざした菓子屋であり続けること。昔から伝わる製造方法や味を大切にしながら、新しい感覚の菓子作りにも挑戦し、小樽で愛される和菓子屋であり続けたいと願っています。

株式会社新倉屋

〒047-0024

小樽市花園1丁目3番1号

[TEL] 0134-27-2122

[FAX] 0134-33-3180

[HP] <https://www.niikuraya.com>

●沿革

- 明治28年 初代・佐井キクにより創業
- 昭和11年 花園だんごの製造販売を開始
- 昭和30年 全国菓子観光大博覧会にて花園だんごが最高賞を受賞
- 昭和63年 菓子匠新倉屋としてだんご屋から菓子屋に転身
- 平成11年 花園本店改装



代表取締役社長
新倉 正三

小樽を見守る老舗時計店 かつての名建築が今も残る

創業

1896年

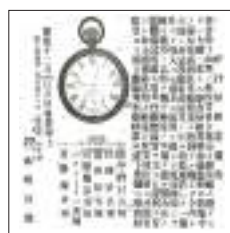
明治29年



岩永楽隊結成記念 (明治33年)



創業者 岩永新太郎



小樽新聞 (明治29年12月3日)の開業広告

株式会社 岩永時計店

腕時計がない時代から現代まで

初代・岩永新太郎は明治8年、岐阜県に生まれ、同14年父・新三郎と共に6歳頃に來樽。現南小樽駅周辺において古衣および質屋業を始めました。同28年父から事業を継いだ新太郎でしたが、その後永井町一帯の大火災に遭い、明治29年に堺町へ移り「岩永時計店」を開業しました。当時はまだ腕時計は無く、懐中時計や柱・置時計などを販売・修理する店として営業を開始。昭和20〜30年代には道内に支店を4店舗開業し、平成2年に丸井今井小樽店に出店後、平成21年からは都通り商店街内の店舗のみを営業。国内外のメーカーの腕時計や掛け時計、宝飾品の取り扱いおよび修理を行っております。

観光客を魅了こだわりの元本店

明治32年に新太郎が建てた店舗は現在、「小樽オルゴール堂堺町店」として現存しており、昭和60年に小樽市指定歴史的建造物に指定されました。この建物は木骨石造の2階建て1階側面、2階半円アーチ型入り口とバルコニーの壁にはギリシャ建築に見られる葉模様が浮彫りされています。屋

根の上には一対のシヤチホコが乗っており、細部にもデザインが施され当時の意気込みが感じられます。この建物の造築に当時1万円かかったそうです。店員で結成された店舗専属の楽団もあつたようで、その当時でもハイカラな商店でした。

株式会社岩永時計店

〒047-0032

小樽市稲穂2丁目9番8号

[TEL] 0134-33-8618

[FAX] 0134-33-8619

[HP] <https://iwanagatokei.co.jp>

●沿革

- 明治29年 堺町20番地に岩永時計店開業
- 明治32年 堺町26番地で新店舗開業
- 昭和24年 株式会社岩永時計店登記
- 昭和25年頃 札幌・夕張等道内に4店舗開業
- 昭和60年 本店が小樽市指定歴史的建造物に指定
- 平成5年 本店が小樽市都市景観賞受賞
- 平成31年 本店を小樽オルゴール堂に売却



代表取締役
岩永 尚己

126年続いた親子4代の歴史 道内最古となった歯科医院

創業

1896年

明治29年



開業時から唯一残る掛け時計



小樽区外十郡歯科医師会
(前列右から3番目が初代院長・光太郎)

医療法人 長谷川歯科医院

教員から歯科医師へ

初代院長・長谷川光太郎は四国松山生まれ、漢学を勉強したのち小学校の教員として勤務するも、30歳のときに医をもって世の中に尽くす志をたて上京。高山歯科医学院（現在の東京歯科大学）で学び、歯科医師になりました。明治29年、新天地の地で、新築洋風2階建ての歯科医院を開業するに至ります。そのときは小樽で2番目、北海道で4番目に開業した歯科医院でした。光太郎は大正7年、小樽区外十郡の初代歯科医師会会長などを務め、小樽堺町ほか余市にも出張所を開設するなど、後志一帯の医療に尽くしました。

4代が同じ歯科大学出身

太平洋戦争で戦禍が激しくなった昭和18年、医院の土地、家とも軍事道路用地として無償で没収され、現在の場所へ移転を余儀なくされましたが、戦後も医院は継続し、人々の歯の健康のために貢献してまいりました。現在では4代目が院長を務めますが、親子4代に渡り、同じ東京歯科大学出身の歯科医師一家として知られ、それは全国的にも珍しいとされています。そしてさらに、

道内で営業する最古の歯科医院として歴史を積み上げてきました。現在は、一般歯科、審美歯科はもちろん虫歯と歯周病を予防するPMTC（専門医による歯のクリーニング）にも力を入れ、時代に合わせた最先端の歯科治療を行っております。

医療法人 長谷川歯科医院

〒047-0031

小樽市色内1丁目11番7号

【TEL】0134-22-8258

【FAX】0134-32-1799

【HP】<https://www.hasegawa-shika-otaru.com/>

●沿革

明治29年 初代院長・長谷川光太郎が堺町に開業

大正 7年 小樽区外十郡歯科医師会設立。

光太郎会長就任

大正13年 2代目修が院長を引き継ぐ

昭和26年 医療法人設立、2代目修が理事長就任

昭和53年 3代目院長修二が理事長を引き継ぐ

平成21年 4代目淳が院長就任



院長
長谷川 淳

今も残る小樽の象徴 一流の技術で造り上げた石造建築

創業

1896年

明治29年



2代目、3代目が手がけた小樽市役所庁舎



工事施工例

株式会社 山本工業所

小樽の“顔”を造った石工職人

新潟出身の初代・山本佐市は、明治29年石材業を創業。以来、加工しやすく、耐火・防火性に富んだ札幌軟石などを用的、小樽発展の象徴である石造の建物を造ってまいりました。2代目仁三郎は小樽市役所、警察署、小樽倉庫、余市二ツカ工場、小樽駅など数多くの風格ある建物を手がけました。小樽市は函館と同じく洋式建築をいち早く取り入れ、石工は全国でもトップの技術を持ち、当社も戦前までは常時5〜6人の職人が住み込み、札幌軟石のほか硬石、十勝ミカゲ石など、本州からも絶え間なく石を運び入れては加工し、休む暇もないほどでした。

形を変えて歴史を繋ぐ

戦争が始まると優秀な石工たちは次々と戦地に行き、戦後も職人の数は減る一方でした。仕事を引き継ぐ人はなく、市内の石屋は次々と廃業。昭和15年の小樽石工同業組合の名簿には120軒の石材屋の記載がありました。昭和55年の組合の名簿にはわずか12軒の名前が残るのみでした。しかし時代が進み、小樽が観光都市として再生

したことにより、先代が休む間も惜しんで作り続けた、歴史ある建物が再評価される時代となりました。札幌軟石は北海道遺産にも指定されています。当社も現在は街の記念碑の設置や公共施設の工事を通して、その歴史を繋いでおります。

株式会社山本工業所

〒047-0024
小樽市花園2丁目11番23号
【TEL】0134-22-9370
【FAX】0134-23-0431

●沿革

明治29年 初代・山本佐市が石材業を創業
大正10年 2代目仁三郎が継承
昭和31年 株式会社山本工業所に改組
昭和41年 3代目照男代表取締役就任
平成20年 4代目典子が代表取締役就任



代表取締役
山本 典子

実業家として成功した創業者 社会への奉仕活動にも尽力

創業

1897年

明治30年

株式会社

荒田商会



丸岡城前で (中央が太吉の妻ミツ)



初代 荒田太吉



2代目 荒田清司



3代目 荒田一正



昭和56年度三菱石油全国優秀給油所となった堺町給油所 (当時)



小樽市指定歴史的建造物の荒田商会本店事務所(当時)
(写真提供 川嶋王志)

荒田商店から事業を拡大

初代・荒田太吉は、福井県丸岡町から北海道に渡り、明治30年、個人で創業。当時は石油販売業、海運業、鉱山業、漁業、農業など幅広い業種を手掛けました。昭和4年「合資会社荒田商会」に、昭和10年に株式会社へ改組し、戦中は物資統制令により海運、石油販売、鉱山業は中止せざるを得なくなり、しかし、戦後も精力的に事業をのびつづつ、国家社会に対する奉仕のため、日本赤十字をはじめ小樽警察署員宿所、小樽経専の商大昇格などに対してさまざまな寄付を行い、小樽商工会議所の常議員などを務め、小樽の発展に貢献しました。

事業とともに社会貢献を

平素から太吉は「祖先を粗末にする者は成功しない」として親孝行に努めました。郷里への想いも強く持ち続け、国宝(当時)であった古城・丸岡城が昭和23年の大地震で被災した際、改修工事のために多額の寄付を行いました。小樽の地で成功した実業家太吉の善行は、今も丸岡町民の間で語り継がれております。3代目荒田一正も社会貢献に努め旭日双光章や小樽市功労者表彰

など、多数の表彰をいただいております。4代目荒田純司となり、現在はガソリンスタンドや燃料小売業を主体とし商いをしております。地域密着型企業としてこれからも、小樽のために地域貢献を行っていきたいと思っております。

株式会社荒田商会

〒047-0022
小樽市松ケ枝1丁目32番6号
【TEL】0134-23-6261
【FAX】0134-34-1614

●沿革

- 明治30年 初代・荒田太吉が荒田商店創業
- 昭和 4年 合資会社荒田商会設立
- 昭和10年 株式会社荒田商会に改組
- 昭和24年 三菱石油株式会社特約店になる
- 昭和38年 2代目清司が代表取締役社長就任
- 平成 2年 3代目一正が代表取締役社長就任
- 平成29年 4代目純司が代表取締役社長就任



代表取締役社長
荒田 純司

道内の住宅・ホテルに 木のぬくもりを伝え続ける

創業

1897年

明治30年

有限会社 本間木工品製作所



創業者 本間清太郎



現在の工場内

明治から木工品製作一筋に

当社は130年近い年月のなかで、建具や家具など木工品の製作を続けてきました。初代・本間清太郎は新潟から小樽に渡り、木工品製作を始めたそうです。工場は度々移転し、今の花園地区にある小樽図書館の向かいだったことも、塩谷地区だったこともあったと聞いています。

第二次世界大戦中の昭和19年に、会社を設立。企業統制で軍の指定工場として稼働していました。市内の建具屋の親方衆も働きにきて、従業員数が一時的に増加しました。活況だった夕張炭鉱の「炭鉱住宅」にふすまや建具などを、既製品のように同じ形状で作って納品していたと聞いています。戦争が終わると企業統制がなくなったこともあり、みなさんには退職金を払い辞めていただくことになったそうです。

既製品にはない魅力を伝えたい

昭和40年代にはアルミサッシも扱うようになり、平成元年その部門は分社化しました。以来、従業員数は10名前後で、札幌から函館、稚内など道内全域の住宅やマンション、ホテル向けに建具や造作家具などを

を製作しています。既製品が大量に流通する時代ですが、造作家具の魅力はその場所にぴったりのサイズになること。設計事務所がお客様から汲み取った想いを、私たちは木のぬくもりを感じる一品にして届けたいと思っています。

有限会社本間木工品製作所

〒047-0152
小樽市新光5丁目8番3号
【TEL】0134-51-3777
【FAX】0134-54-8639

●沿革

明治30年	初代・本間清太郎が創業
昭和19年	会社設立
昭和20年頃	企業統制により軍の指定工場となる。 夕張炭鉱住宅に建具などを納品
平成元年	アルミ部門を分社化
平成19年	火災により入船町から新光町に移転
令和 3年	代表者が本間彰から貴之に変更



代表取締役社長
本間 貴之

庶民の善意から始まった 福祉の精神を引き継ぎ125年

創業

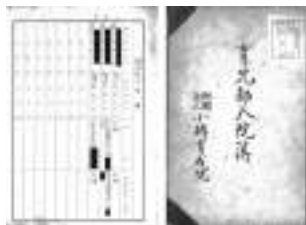
1898年

明治31年

社会福祉法人 小樽育成院



今も前面の市道に「育成院」の名が残る奥沢村141番地の院舎
(明治44年建設)



3名の孤児名が載った「育児部入院簿」



中島武兵(右)と奥水伊代吉(左)

始まりは孤児の保護から

岩手出身の初代・中島武兵が、ある事件に連座し罰せられたことを機に前半生を潔め、世のために尽くしたいと考えていたとき、偶然に3名の「捨て子」男児を保護。

明治31年「小樽孤児院」の看板をあげたのが当法人の始まりです。小樽の急激な発展の陰で保護児童が急増しその後は経営困難となりますが、明治39年、印刷所に勤務していた3代目院主・奥水伊代吉が引き継ぎます。伊代吉は寄付金に頼らない経営を目指し、院内から収益を生み出す「授産部」を設立。紙袋や雑巾の生産のほか、住吉神社付近の国道沿いでの朝市の経営など事業を拡大して多くの子供達の命と暮らしを守りました。

高齢者施設として 先人の思いを引き継ぐ

戦後は児童部門を廃止して高齢者施設として再出発し、昭和39年にオタモイに院舎を建設して移転。今日では高齢者福祉・介護事業を幅広く展開しています。孤児を男手ひとつで保護・養育した中島や、厳しい経営状況の中事業を引き継いだ奥水。彼らは著名人でも資産家でもない普通の庶民で

したが、目の前にいる子供達を見捨てず手を差し伸べました。これこそが福祉の原点です。このような考え方と実践は、当法人の120年を超える長い歴史と経験の中で引き継がれてきました。これからも「基本的人権の確保と擁護」を運営理念に質の高い介護・福祉サービスを提供し、誰もが安心して暮らせる社会の実現に寄与して参ります。

社会福祉法人 小樽育成院

〒048-2671

小樽市オタモイ1丁目20番18号

[TEL] 0134-28-2500

[FAX] 0134-65-8071

[HP] <http://www.otaru-ikuseiin.com/>

●沿革

明治31年 初代・中島武兵が小樽孤児院を発足

明治39年 3代目奥水伊代吉が施設を引き継ぐ

明治43年 財団法人小樽育成院として認可

昭和2年 養老部を開設

昭和27年 社会福祉法人に組織変更

平成20年 全国社会福祉協議会設立

100周年記念特別表彰を受賞



理事長
福森 和千代

小樽の酒「宝川」を醸造 本店と製造場を観光名所に

創業

1899年

明治32年



創業時の造り酒屋の歴史と風情がそのまま残っている本店内部



創業時からの登録商標 (小樽市史)



本店外観 小樽市の指定歴史的建造物

カネイ
曲イ田中酒造

株式会社

小樽で唯一の造り酒屋

初代・田中市太郎は岐阜県大垣市で刀鍛冶を家業としていましたが、明治時代、新天地を求めて小樽へ移ります。洋品店での丁稚奉公を経て20代で酒造業に将来性を見出し、明治32年に独立して創業。当時は焼酎・みりん・白酒を製造。大正12年に代表銘柄・清酒「宝川（たからがわ）」の誕生に至ります。平成元年に本店を、平成7年に製造場「亀甲蔵」を観光客向けに改造。歴史的建造物に指定されている建物を活かし、昔の雰囲気と酒の味や製造見学が楽しめる名所として観光産業にも寄与してまいりました。平成28年、かつては50場以上あった小樽の酒造産業ですが、当社は小樽唯一の造り酒屋となっていました。

手間ひまかけた純米酒のみを少量製造

「亀甲蔵」は、冷涼な気候を活かし1年を通じて酒を仕込む「四季醸造」を行う、全国的にも珍しい酒蔵です。仕込み水は市内の天狗山からの伏流水を使用し、純米酒のみにこだわって製造しています。杜氏ほかスタッフが、契約農家で田植えから収穫までの農作業にチャレンジしております。

1年間に製造する酒の量は、例えるならば大量生産するメーカーが1日で製造するよくなわずかな量。丁寧に製造した酒は「宝川」を中心に「しほりたて生原酒」「季節限定酒」が人気です。「宝川」は「北海道米でつくる日本酒アワード2022」の審査委員長賞ほか受賞多数。現在は4代目・一良がその伝統を継承し努力を重ねております。

曲イ田中酒造 株式会社

〒047-0031
小樽市色内3丁目2番5号
【TEL】0134-23-0390
【FAX】0134-22-7210
【HP】<https://tanakashuzo.com>

●沿革

明治32年 初代・田中市太郎現本店所在地にて創業
大正12年 清酒の醸造を始め銘酒名を宝川とする
昭和31年 法人化し曲イ田中酒造株式会社設立
昭和63年 4代目・一良が代表に就任
平成元年 本店を観光客向け店舗へと改修
平成7年 製造場の亀甲蔵を観光蔵に改造
令和元年 創業120年に至る



代表取締役
田中 一良

金物製作専門で4代目 身近な鉄製品で町を元気に

創業

1899年

明治32年

有限会社 マルイ酒井鉄工所



馬車が行き交う中央通り(資料写真)
(明治末期~大正初期 小樽市総合博物館提供)



施工例(鉄骨階段 令和4年)



現場作業風景

始まりは農具関連や蹄鉄から

当社は金物製作を専門に120年の歴史を歩んでまいりました。初代・酒井伯臈は、福井県越前町の出身で明治32年に小樽に移住。当時は、馬車を引く馬などの蹄鉄を始めとする馬具や農具関連の金物を製作。大正11年には、2代目市助に代表を変更します。当時は、住み込みの職人もいて5、6人の規模で金物製作を続けていたそうです。また、第二次世界大戦中は、道具や鉄を没収されないよう、最低限の仕事用道具を隠していたと聞いております。

3代目武二のころには、窓の雪囲い金物や鉄骨階段、スチール手すりなどの建築金物製作を始め、昭和54年には有限会社を設立しました。

地元小樽の街を盛り上げたい

現在の代表で4代目となる伸一のところには、北一硝子三号館のシャンデリアやランプなどの鉄の製作、取り付けも担当。そのほかにも、小樽駅内のランプ受架台や運河プラザのツリー架台など、観光客の方々にも親しまれている金物製作を行いました。先代の武二も今の代表の伸一も一緒に

なり、みんなで作り上げたのが思い出深く残っております。

今後とも、小さな仕事もたくさん受注し、多くの業者さんとの信頼関係を大切にしつつ、ともに地元小樽市を盛り上げていきたいと願っております。

有限会社マルイ酒井鉄工所

〒047-0033
小樽市富岡1丁目20番5号
【TEL】0134-22-3022
【FAX】0134-29-3800

●沿革

明治32年 初代・酒井伯臈が金物制作業を開始
大正11年 代表が酒井伯臈から2代目市助に変更
昭和38年 代表が酒井市助から3代目武二に変更。
建築金物製作を開始
昭和54年 会社設立
昭和62年 代表が酒井武二から4代目伸一に変更



取締役
酒井 伸一

地域の人々が集う憩いの場 銭湯の灯をともし続けて

創業

1900年

明治33年

小樽公衆浴場 商業協同組合



現在営業している
小樽市内の銭湯

- 1 朝日湯
- 2 大正湯温泉
- 3 神仏湯温泉
- 4 柳川湯
- 5 奥沢温泉中央湯

公衆浴場法をもとに衛生管理

本組合は、明治33年に北・中・南の3つの湯屋組合が誕生したことに始まります。明治40年に、3組合を小樽湯屋業組合に統合。代表理事は初代・村住三右衛門から数えて、現在は21代目。「朝日湯」を営業する村吉が務めております。北海道公衆浴場業生活衛生同業組合の地方組織として共通入浴券発行などの活動や、公衆浴場法にのっとり、保健衛生水準の向上に努めております。

市内5軒の銭湯で組織

公衆浴場の最盛期、小樽がもつとも繁栄し住民や働き手が増加した時期には、60〜70軒が営業しておりました。時代は変わり、住宅環境は大きく改善されました。生活様式も変わり自家風呂の普及、後継者不足や燃料の高騰などの諸問題により、小樽の公衆浴場は年々減り続けました。

現在の本組合加盟湯は「朝日湯」「柳川湯」「大正湯」「神仏湯」「中央湯」の5軒のみで、そのうち大正時代から続いているのは3軒を残すのみとなりました。

市内には大型温泉施設もありますが、公

衆浴場は地域コミュニティの憩いの場として万人を受け入れ、ゆとりや安らぎを与える役割もございます。組合創立以来122年。数は少なくなりましたが、今後とも皆様に愛される「銭湯」を守り続けるため、活動していきたいと思えます。

小樽公衆浴場商業協同組合

代表理事 村吉 哲

〒047-0031 小樽市色内2丁目13番5号 小樽市民センター内
【TEL】0134-22-9045 【FAX】0134-22-9045

●沿革

- 明治33年 小樽湯屋業北組合・中組合・南組合組織
- 明治40年 3組合を小樽湯屋業組合に統合
- 大正10年 小樽浴場組合に改称
- 昭和20年 手宮町貯炭地購入
- 昭和27年 小樽公衆浴場商業協同組合に改組
- 昭和47年 組合創立65周年記念式典挙行
- 平成12年 組合創立100周年記念式典挙行

発明品を持って井戸堀りで開業 管工事業へ発展して7代目

創業

1901年

明治34年

株式会社丸コ組



木製ポンプと6代目（現会長）
約25年前、4代目が当時腕利きの大工に依頼して作成した



創業者 平口山幸助



ポンプに押印され
ている焼印



特許願
(明治31年)

初代発案の「無臭竹筒」

石川県金沢市出身の初代・平口山幸助は、「無臭竹筒」という井戸の揚水管を発案し、特許を申請。それが認められ、商売の新天地として小樽へと渡ってきました。「無臭竹筒」とは、竹の節をくり抜き内側に特殊な加工を施したパイプだったようです。

小樽で井戸を掘る請負業を始めた幸助は、2代目幸治とともに昭和6年「合資会社丸コ唧筒（ポンプ）製作所」を設立。幸治は、その後も井戸請負業に専念し、市内同業者の組合世話役になるなど、現在の丸コ組の基盤を残しました。

社員出身の7代目が代表取締役に

井戸は手掘りで、井戸杵を地面に押し込んで掘り進める方法が基本でした。その後、時代とともに井戸は減り続けましたが、当社は初代が発案した竹のパイプをルーツに、現在は管工事業全般を行っております。給排水管をはじめとする官公庁などの水道管工事を主体に、ボイラーやエアコンなど冷暖房設備工事全般も行っています。水道と設備の組合にも加盟し、6代目が会長職に就きながら副理事長など役員活動も行つ

ております。当社、代表取締役は代々創業家から引き継いできましたが、令和4年の6月、初の社員出身の代表取締役が就任し、また新たな時代を切り開く体制を整えました。

●沿革

- 明治34年 初代・平口山幸助が井戸請負業を始める
- 昭和 6年 合資会社丸コ唧筒製作所設立。2代目幸治代表就任
- 昭和26年 有限会社丸コ組設立。3代目忠治代表取締役就任
- 昭和53年 4代目謙一代表取締役就任
- 平成 2年 株式会社丸コ組改組
- 平成27年 5代目正幸代表取締役に就任
- 平成28年 6代目和弘代表取締役に就任
- 令和 4年 7代目三船勝博代表取締役に就任

株式会社丸コ組

〒047-0032
小樽市稲穂1丁目7番1号
【TEL】 0134-33-5050
【FAX】 0134-33-5019



代表取締役
三船 勝博

屋根枳から始まり現代の鋼板屋根を専門に 屋根工事一筋121年

創業

1901年

明治34年

有限会社

矢崎工業所



工場内



小樽市葬斎場 (令和4年)



花園町に残る約40年前の枳
(杉の皮葺)



当社最後の枳職人
3代目 (現会長)

原木から切り出す屋根枳

当社は、初代・矢崎外茂男が富山県より渡道。花園町の金物問屋「カネキチ吉田」への丁稚奉公から始まります。その後、のれん分けとして屋根枳部門を受け継ぎ独立。「㊦矢崎」を創業しました。屋根枳とは、屋根に貼る鉄板の下に葺く木材の下板で、葺く仕事のない冬場は、工場職人たちが屋根枳を作っていました。当時、原木を馬車に積み稲穂町の工場まで運び、丸太を均等に切つて湯に浸けてから、手で割つて板にするという大変な手作業でした。商売が忙しくなると、商店や民家が多い稲穂町では手狭となり、その後緑町に移転しました。

屋根枳から屋根板金工事業に

2代目順次は、商業系の学校を出たので経理面も手掛け、昭和のころは貸家も50軒ほど所有しながら家業を守りました。当時は市内の屋根枳業者の組合がありました。が、時代の変化とともに屋根枳の需要は減り、組合もなくなりました。

当社はその後、屋根板金工事業にシフトしていきま。現在も緑町に本社工場を構

え、市内および近郊にて官公庁・一般住宅・企業などの屋根工事全般を請け負っておりま。また、4代目が新たに住宅リフォーム事業を始めるなど、これからも時代のニーズに合わせた事業へと柔軟に展開し、創業121年の「矢崎工業所」を守っていきたいと思いま。

有限会社矢崎工業所

〒047-0034
小樽市緑1丁目4番19号
【TEL】 0134-22-1929
【FAX】 0134-22-2868

●沿革

明治34年 初代・矢崎外茂男が㊦矢崎を創業
昭和23年 2代目順次が事業継承
昭和51年 有限会社矢崎工業所に改組。順次が代表取締役役に就任
昭和57年 3代目勇二代表取締役役に就任
平成13年 創立100周年の祝賀会を開催
平成31年 4代目義典代表取締役役に就任



代表取締役
矢崎 義典

鍛冶職人から漁具製造へ 受け継がれる物作りの精神

創業

1905年

明治38年



鍛造



炉

有限会社 アイゼンイッテツ

漁業で求められる道具を一品製作

明治38年、加賀前田藩（現石川県）の御用鍛冶をしていた初代・一鐵岩太郎が現在の高島に移住。当時、木で作られていた木タテ貝採取漁具を鍛造の技術を用い、鉄で製作したのが創業の始まりです。その後、工場を銭函に移し、岩太郎の孫、4代目照夫が平成9年にアンカー（錨）部門を分離独立させ今に至ります。当社の主力商品は錨で、2〜450kg（全長65cm〜3m）まで幅広く製造しており、原料となる鉄鋼の使用量は年間数百トンになります。出荷先は全国約30社で、近年は関東や東北地方からの発注も3割ほどあり、現地の要望に沿った形の錨を一品ずつ製作しております。

道内外の地域に合わせた錨造り

錨の爪の角度については、地域によって変えています。海流が速い北海道の外海では鋭い角度、東北の穏やかな内海では緩やかな角度にしなければなりません。当社では、職人自ら各地の漁業関係者からニーズを聞き取ったうえで製作を開始。高い加工技術を生かして需要に合う錨を造り上げています。これまでのノウハウや蓄積を応用

し、錨だけではなく養殖用いけす枠、エビやカニのカゴ、昆布乾燥機や切断機などの漁具全般も手がけるようになりました。今後も照夫の「品質は良くて当たり前。愚直に物を作り続ける」との姿勢を守り抜き、漁業に貢献してまいります。

有限会社アイゼンイッテツ

〒047-0264

小樽市桂岡町4番20号

【TEL】0134-62-7951

【FAX】0134-62-7952

●沿革

- 明治38年 初代・一鐵岩太郎が現在の高島に移住
漁具製作を始める。
- 昭和15年 手宮に工場を移転。代表者を裕司に変更
- 昭和28年 株式会社一鐵鐵工所設立
- 昭和60年 3代目巖が引き継ぐ
- 平成9年 4代目照夫が(有)アイゼンイッテツ設立
- 平成28年 5代目滋子が引き継ぐ



代表取締役
一鐵 滋子

素材本来の味を生かした こだわりの水産惣菜を販売

創業

1905年

明治38年

株式会社 丸一土井水産



手作りエビフライ(筋切り、背わた除去、衣付けまですべて手作業)



ホッケフライ(衣も当社オリジナル)



原料の前処理からすべて自社で行う

仲買から冷凍食品製造へ

初代・土井豊吉は、明治38年に「丸一土井商店」を創立。ニシン漁などで賑わう小樽港で水産物の仲買から商売を始め、大正5年にスケソウダラ、ニシンなどの水産加工品の製造販売を開始しました。第二次世界大戦開戦の2年後には、工場を新設。戦中戦後の激動期をくぐり抜け、昭和56年には、北海道内・外のスーパーや量販店向けの水産冷凍食品の製造を始めました。

4代目譲は、北海道内の学校給食用の需要に着目し冷凍食品を納品。当社の主力商品のひとつである学校給食用「手作りエビフライ」は、背わたの除去から衣付けまですべて手作業で行うこだわりの商品で、年間4〜5トンの取り扱いを続け、子どもたちに親しまれています。

食文化に貢献する企業を目指す

現在は、エビフライやホッケフライなどの冷凍食品、焼魚・煮魚などの業務用製品を製造。当社のこだわりは、天然エビなどの良質な原料の味を生かせるよう添加物を極力使用しないこと。そして、原料の前処理からすべて自社で行いながら、徹底

した生産管理で在庫を置かずに来たてを出荷すること。おいしい商品を作り続けることとお客様に一層満足していただけることを目指しています。高品質で衛生的な商品で、北海道の食文化に貢献できる企業でありたいと願っています。

株式会社丸一土井水産

〒047-0047
小樽市祝津2丁目347番地
【TEL】0134-25-0336
【FAX】0134-29-0121

●沿革

明治38年 初代・土井豊吉が水産物仲買業を開始
大正 5年 スケソウダラ、ニシンの加工販売開始
昭和16年 工場新設。2代目豊太代表取締役就任
昭和31年 3代目善治代表取締役就任
昭和50年 株式会社丸一土井水産設立
昭和62年 4代目譲代表取締役就任
平成 5年 新社屋完成



代表取締役
土井 譲

地域と生産者に必要とされる お店を目指して

創業

1906年

明治39年

株式会社 丸い遠藤商店



初代小平治と一夫と一緒に写っている貴重な一枚（大正末期～昭和初期）



店頭にて（昭和7年）



店舗外観（昭和55年頃）

空前の賑わいで手宮地区が発展

明治時代、木材の卸業に従事していた初代・遠藤小平治が、その仕事を引退するにあたり、老後に向けた仕事として明治39年、小間物屋「遠藤商店」を創業しました。

当時は日露戦争勝利により樺太貿易が始まり、「遠藤商店」は米の配給所になったこともあり店頭は活況を呈しました。小平治は自身の郷里である新潟県から甥にあたる渡辺一夫を養子として迎え、その後、実直な一夫は商売に精を出し期待に応えます。一夫はのちに2代目小平治を襲名。昭和32年には「有限会社丸い遠藤商店」として登記するに至ります。その後3代目幸吉が、昭和59年に4代目の自身が継承し、平成7年に株式会社に変更しました。

専門店ならではのこだわりを届ける

現在は日米連認定お米マイスターでもある私が「オーダーメイドのお米とおいしいワイン」をかかげ、特別栽培米とワイン＆清酒・本格焼酎を扱う「米屋」を展開しております。主に後志の契約栽培農家とつながり、生産者・お客様・地域に必要な店を目指し受け継いだ暖簾を守っております。

株式会社 丸い遠藤商店

〒047-0043
小樽市豊川町14番3号
【TEL】 0134-33-2201
【FAX】 0134-33-2202
【HP】 <http://shop.gtotal.com/endo/index.html>

●沿革

明治39年 初代・遠藤小平治が荒物雑貨食品屋、丸い遠藤商店を創業（「丸い」という印は「いろは」の「い」を掲げるにより「信用第一」を表す）
大正 5年 新潟より甥の渡辺一夫を養子に迎える
昭和32年 有限会社丸い遠藤商店として法人登記
昭和59年 4代目友紀雄が営業を受け継ぐ
平成 7年 株式会社丸い遠藤商店として改組し登記



代表取締役
遠藤 友紀雄

自社精米ラインを備え、一般・各飲食店様向けにオーダーメイドのお米を販売。米の品種・栽培方法・精米方法・ブレンドや炊き方まで、米に関する知識や経験を活かし、専門店ならではの提案やサービスを提供。後志と世界のワインも多数販売しております。

桐ダンス・家具金物がルーツ 事業を広げ不動産業まで

創業

1906年

明治39年

株式会社

オオツカ



製作した家具と創業者長男の大塚健一郎（大正12年頃）



創業者大塚孝次郎（中央）と家族（昭和15年頃 店の前にて）



法人化した大塚昭典（創業者五男）

創業は桐箆筒の製作販売

新潟で桐箆筒職人をしてきた初代・大塚孝次郎は、日露戦争に従軍し樺太へ向かう途中で小樽に寄港した際、街の繁栄ぶりに驚きました。除隊した後、明治39年に妻の夕カと小樽に移住し、相生町の職人町にて桐箆筒を製作販売する大塚孝次郎商店を創業しました。孝次郎23歳の時です。以来、同じ場所でも商売を営んでいます。

北海道の発展に支えられて商売は順調に成長し、多くの職人も育てましたが、戦争の影響と戦後の洋箆筒の普及により、桐箆筒の製作販売は昭和33年に廃業しています。一方、新潟の三条から仕入れていた家具金物を同業者に販売することを昭和15年に始めています。これを基盤に、昭和41年に大塚昭典が株式会社法人化して代表取締役就任し、建具金物販売や内装業に業種を拡大していきました。

株式会社オオツカに社名変更

昭和50年に社名を現在の名称に変更しました。現在の代表取締役は平成13年に就任した中村五万雄です。中村は昭和33年に大塚孝次郎商店に入店し、昭和41年から専務

取締役を務めていました。

従来からの家具・建具・装飾・建築金物の販売、住宅機器・電動工具の販売、アルミサッシやクロスなど内装品の販売・施工を行うとともに、現在は、建築及び土木工事の設計施工、不動産業も手掛けています。

- 沿革
- 明治39年 初代・大塚孝次郎商店創業
桐ダンスの製作販売
- 昭和15年 家具金物の販売を開始
- 昭和33年 家具金物販売卸売を専業
- 昭和41年 株式会社大塚孝次郎商店に改組
業種を徐々に拡大
- 昭和50年 株式会社オオツカに社名変更

株式会社オオツカ

〒047-0028
小樽市相生町8番15号
【TEL】0134-23-7104
【FAX】0134-23-7106



代表取締役
中村 五万雄

北国の建築を板金技術で支え 組織力で業界に長く貢献

創業

1906年

明治39年

小樽板金工業 協同組合



小樽創立10周年祝賀会を小樽倶楽部で挙行



大正時代の作業服



ガス溶接実習風景
(西村板金工場にて 昭和54年)

人材育成のため職業訓練所開設

道内の板金業は明治初頭、開拓使官営の施設建設を始まりとして、鉄葉業（ブリキ加工業）が発展したことにより広がっていきました。その後の明治32年、越後より小樽に移住した栗林伝七が鉄力細工業を始め、明治39年に、伝七と同じように本州から来樽した数人の職人が「小樽銅鐵板細工業」を設立。明治45年ごろには油缶の大量生産を行うことを思いつき、機械設備の導入、組合員への指導を行います。昭和30年代に入り、産業経済界は技術革新にもない飛躍的に発展。必然的に、技能労働者力の不足が起こったため、組合として技能者養成訓練を開始。昭和33年、認定「小樽地区板金共同職業訓練所」として本格的に後進技能者の育成に取り組みました。たくさんの方の訓練終了者、指導者を輩出し業界に貢献。一定の役割を終え、昭和50年代には休校となりました。

組合員の技術と労働環境の向上

昭和60年代はさらなる組織の強化・責任施工体制の推進などを推し進めるとともに、組合員の技術向上に努めてまいりました。

た。責任施工制度スタート時には、青年部も発足。若手が活躍できるような環境づくりも行い、現在、屋根外装調査士に関しては当組合で16名が認定を受けています。現組合員は31名。理事長は28代目となり、創立は116年を過ぎる長い歴史を有しています。

小樽板金工業協同組合

〒047-0032
小樽市稲穂2丁目7番1号
【TEL】0134-22-4597
【FAX】0134-22-5009

●沿革

明治39年 小樽銅鐵板細工業設立。初代理事長は丸茂眞吉
昭和13年 小樽鐵製品工業組合に改称
昭和29年 技術者養成所開設
平成17年 創立100周年を迎え式典を行う
令和 4年 道中小企業団体中央会
「優良組合等表彰」「組合功労者表彰」



理事長
北 幸治

森を育くみ木を活かす 木材とともに一世紀

創業

1906年

明治39年

株式会社

新宮商行



小樽本社（大正9年元旦撮）



坂口茂次郎（左）と利光小三郎

鉄道の枕木受注からスタート

当社の創業は、和歌山県出身の利光小三郎、植松新十郎、阪井弥三太、坂口茂次郎の4名が行った、紀州材の海外輸出から始まりました。明治39年、韓国の仁川に本拠地を構え「匿名組合新宮商行」を設立。木材販売および土木建築請負業を商いとし、翌年には韓国鉄道院から鉄道枕木30万本の納入落札に成功します。その後、坂口茂次郎が色内町に出張所を置き、そこから事業は成長。大正6年からは山林の買い付けに着手し、大正8年には株式会社に移組とともに本社を名古屋から小樽へと移転します。稲穂町に当時のお金で5万円を投じた社屋を新築し、大正12年以降は樺太の大道に事業所を開設します。

木を育て木材を生産する貿易会社

現在では合板・集成材など住宅関連部材を供給する木材部、良質な国産林の育成造林を行う山林部、チェーンソーや薪割機などを扱う機械部の3事業を柱とし、古丹別、美幌などに製材工場も所有。釧路管内ほかでの社有林の経営、道産材の国内外への移輸出を行っております。平成17年以降、道

東古梅ほかの社有林に対して、環境に配慮した森林経営が評価されFSCやSGECの加工技術、量産技術を磨き続けて116年。これからも生態系や景観を守りながら木材と関わっていききたいと思っております。



株式会社新宮商行

〒047-0032

小樽市稲穂2丁目1番1号

【TEL】0134-24-1311

【FAX】0134-22-8717

【HP】<https://www.shingu-shoko.co.jp/>

●沿革

- 明治39年 坂口茂次郎ほか4名で韓国仁川に匿名組合新宮商行を設立
- 大正 8年 本社を小樽に移転。株式会社に組織変更
- 昭和10年 銭函工場竣工
- 昭和27年 米国社製チェーンソー輸入販売開始
- 平成17年 古梅山林FSC森林認証グループ取得
- 平成27年 関東支社に旗艦ショールームを設置



代表取締役
坂口 栄治郎

流行り物を置く雑貨店から 絵画を飾る額縁店へ

創業

1906年

明治39年

宮井額縁店



大正12年頃の花園町（写真内左上のゴム判製造の看板が当店）



店舗前（昭和25年頃）



創業者 宮井継圓（明治12年～昭和37年）

新しもの好きだった創業者

初代・宮井継圓（つぎまる）は福井県にある専念寺の次男として生まれました。商いに興味があり明治39年、寺を飛び出し商人として小樽へ渡り、都通りセントラルタウンの観光場で「万屋」という雑貨店を出したと聞いています。

その後、旧日銀裏にゴム印店「三八光（みやこ）商会」を開店。当時の日銀、国鉄や官庁などに「流し込み印」と呼ばれたゴム印を製造・納品していました。大正12年、花園町1丁目に移転。「宮井商会」と名を改めゴム印のほかにもプロマイド、カメラ、アルバムなどいろいろな物を売っていたそうです。商売熱心だった継圓は、小樽で初めて店に蛍光灯をつけ、女性店員を雇ったというほど新しい物事に敏感だったようです。

絵画のある暮らしをご提案

昭和39年の移転を機に、3代目の私が版画家（画号は宮井保郎）ということもあり、額縁の専門店として営業を開始しました。北海道および国内外プロ作家の絵画も販売し、画廊スペースで展覧会や企画展も行っております。私は全国額縁組合連合会第一

期フレイマーの資格を活かし、台紙選びからマットデザイン・色彩など作品に合わせた額装作りとアドバイスをを行い、地域のお客様に絵画のあるインテリアライフをご提案しております。最近では4代目とともに、若い感覚の額装研究を行っております。

宮井額縁店

〒047-0024

小樽市花園1丁目3番3号

[TEL] 0134-23-1607

[FAX] 0134-61-6661

[HP] <https://www.art-miyai.jp/>

●沿革

明治39年 初代・宮井継圓が雑貨店万屋を創業

大正初期 ゴム印屋の三八光商会を開店

大正12年 花園町に移転

昭和20年 強制疎開により向かいに移転

昭和39年 3代目保夫が額縁店として営業を開始

平成24年 旧カネキ河野閉店の跡地へ移転



代表
宮井 保夫

3代目の母の教えは「指先は嘘をつけない」 「お客様に触れる時はより心を込めて」

創業

1907年

明治40年



杉谷理容館（現在の小樽駅前のミスタードーナツあたり）



大正14、5年頃の料金表



昭和40年頃の店内と4代目

ザ・バーバー・オブ・バーバーズ
すぎたに

中央軒からバーバーすぎたにへ

当店の始まりは、富山県魚津出身の初代・杉谷常次郎が、現在の小樽駅前、中央通り近くに開いた理髪店「中央軒」です。その息子、2代目になる正雄夫婦と娘の恵子が店で働いているころ、岩手県の理髪店の息子・鳥畑好夫が住み込みで働くように。店は、建物疎開で場所を移して「杉谷理容館」と名を改め、2代目正雄の没後、昭和32年に好夫と恵子が結婚。好夫が3代目を継ぎ、現在の静屋通りに店を構えたのは昭和37年でした。私は幼い頃から、将来は床屋になつてビルを建てるのが人生の目標となり、高校在学時に通信教育で理容を学修。20歳の時に理容師免許を取得し、21歳、5年の約束で東京へ修行に出ますが、3年後には東京で独立。28歳になる頃には美容師免許も取得して有限会社を設立。仕事が大好きでお客様の髪で遊ばせていただいているという意味合いもあり、屋号を「髪遊」としました。

東京と小樽に常連客を持つ

父・3代目好夫は店の経営と同時に美容学校の講師も務めていました。後に、ある市議会議員の方に熱望され、その方の地

盤を引き継ぎ選挙へ出馬。組合の応援もあつて市議会議員を3期やらせていただき、理容師の育成と市の発展に務めた人でした。

私は東京で常連客を持ちながら、平成14年に実家の店をビルにするという祖父と母と自分の夢を果たし、店名を「ザ・バーバー・オブ・バーバーズすぎたに」に改名。現在は4代目として、東京と小樽の両方で営業（完全予約制）しています。また、5代目候補の子ども達も、近々東京で修行の予定です。

●沿革

- 明治40年 初代・杉谷常次郎が中央軒開業
- 昭和20年 2代目正雄が杉谷理髪館として引き継ぐ
- 昭和37年 現在地に移転
- 昭和43年 店舗改装。
3代目好夫がバーバーすぎたにに改名
- 平成 2年 有限会社髪遊設立
- 平成14年 店舗を7階建てビルに建て替え。
ザ・バーバー・オブ・バーバーズすぎたにに改名

ザ・バーバー・オブ・バーバーズすぎたに

〒047-0032
小樽市稲穂2丁目19番12号
【TEL】 0134-23-2633
【FAX】 0134-23-2633



代表 鳥畑 雅義

畳の文化を守りながら 新時代の「アズマ畳」を提供

創業

1908年

明治41年

東畳工業

株式会社



初代 東竹次郎



創業当時の店舗付近 (左手前が東商店)



畳刺職鑑札 (明治41年)

広がる住宅様式のニーズ

明治41年、新潟県出身の畳職人であった初代・東竹次郎が小樽区役所より畳刺職鑑札を受領し「竹東商店」を創立。営業を開始したのが当社の始まりです。街の発展とともに商売は堅調に推移し、太平洋戦争の戦禍も免れ、昭和25年に法人化。創業以来畳一本で営業を続けておりましたが、昭和40年ごろから日本人の生活スタイルの変化に伴う影響を受け、カーペットやカーテン、インテリア全般を取り扱うようになります。平成8年、奥沢に工場を新築し多様な畳のニーズに対応できる機械を導入する一方、リフォーム事業部も展開するなど、時代に合わせ事業の幅を広げてまいりました。

確かな技術で幅広い要望に対応

当社の畳職人は、職人歴20年以上。琉球畳や現代風なもの、部屋のサイズに合わせた変型加工など、どのようなニーズにも対応できる技術と経験を兼ね備え、畳床の中心材には木質系の素材を使用しており、自然環境にやさしい製品づくりを目指しております。近年では厚さを一般的な置き畳の

倍となる4cmにした、クッション性の高い畳を東京の国立大付属小学校から注文頂くなど、道外のお客様からもネット販売を通じてご好評を頂いております。今後も一畳懸命・安心安全な畳を作ることを信条に、附加価値の高い良品を追求し、真心と良心を添えてお客様に製品をお届けいたします。

東畳工業株式会社

〒047-0021

小樽市入船1丁目11番12号

【TEL】0134-33-5555

【FAX】0134-33-5585

【HP】<https://www.azuma-tatami.co.jp>

●沿革

- 明治41年 初代・東竹次郎 竹東商店を創立
- 大正 8年 2代目清蔵が店を引き継ぐ
- 昭和25年 東畳工業株式会社として法人化
- 昭和45年 3代目完治代表取締役社長就任
- 昭和56年 本店新築インテリア専門店として開店
- 平成 8年 奥沢工場新築
- 平成27年 4代目山口真三子代表取締役社長就任



代表取締役社長
山口 真三子

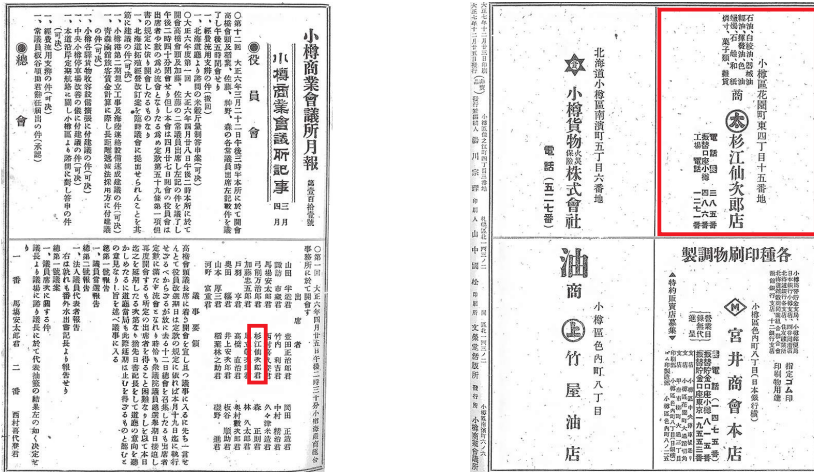
北海道の暮らしを支える エネルギー産業で貢献

創業

1909年

明治42年

杉商株式会社



大正6年4月25日に行われた小樽商業會議所(当時)の總會出席名簿に記載された創業者名

大正7年12月25日発行の小樽商業會議所月報に掲載された当社の広告

雑貨店から保険業界へ

当社は明治42年、創業者・杉江仙次郎が小樽市花園町に店舗を開き、礦(鉱)油、食料品雑貨の卸業、およびローソク製造、販売に始まります。大正12年、色内町に新店舗である「株式会社杉江商店」を構え、昭和7年には三菱石油株式会社と特約店契約を結び、樺太地区の総代理店となりました。年を追ってその販路を広げ、昭和45年に「杉商株式会社」に改称。松下電器産業株式会社(現・パナソニック株式会社)との取引を増大し電子機器関連商品の販売を拡大。時代の趨勢により損害保険の扱高も増大。保険の多目的化に伴い専属社員も増員し、大手保険会社の市内有力代理店に成長しました。

個人法人向けに燃料を安定供給

現在は、ENEOS株式会社の特約店として、市内に2店舗と札幌市と古平町で直営店を展開。その他、車用燃料をはじめ、エンジンオイル、タイヤ、灯油やストーブも取り扱っております。また、法人様向けとして多くの工事現場や病院、官公庁施設など多岐にわたる取引先様への燃料油の供給

を行ってあるほか、自動車用・工業用・船舶用潤滑油の販売も行っております。そして北海道エネルギー株式会社との業務提携により北海道内各地での燃料油供給を可能としております。エネルギー産業を基本に、皆様の暮らしの安心を支える安定供給体制を整え、快適で豊かな暮らしに貢献してまいります。

●沿革

- 明治42年 杉江仙次郎、④杉江仙次郎商店を創業
- 大正12年 株式会社杉江商店として改組
- 昭和7年 三菱石油(株)樺太地区総代理店となる
- 昭和27年 2代目杉江猛代表取締役就任
- 昭和28年 火災保険代理店業を開始
- 昭和46年 3代目杉江雄太郎代表取締役就任
- 平成3年 4代目杉江俊太郎代表取締役就任

杉商株式会社

〒047-0032
小樽市稲穂2丁目9番16号
【TEL】0134-25-1105
【FAX】0134-25-1113
【HP】https://sugishou.net



代表取締役
杉江 俊太郎

たらこ・数の子・いくららの魚卵一筋 北海道産にこだわる入久ブランド

創業

1910年

明治43年



数の子、たらこの作業風景



王様のうに(佃煮)
第3回小樽水産加工グランプリ銀賞受賞



入久ブランドの商品群



『ホタテdeポン』(3種の味)セット
第4回小樽水産加工グランプリ金賞受賞

有限会社

入久三浦水産

徹底した道産原料の追求

明治43年、初代・三浦喜兵衛が祝津に創業。以来たらこ・数の子などの魚卵製造を中心に日々家業に勤しんでおります。 motto「真心の味」であり、100余年間変わることなくその精神は受け継がれてきました。現在、一般的な魚卵加工品の原料が海外産の冷凍品であることが多い中、当社は真の道産として誇れる製品を提供すべく原料に徹底的にこだわっております。主力商品の塩たらこは、鮮度のよい北海道噴火湾で捕獲した、スケトウダラの生の卵だけを使用し、塩数の子は小樽前浜産だけを使用しています。

北海道の味をこれからも

現在当社の商品は「入久(いりきゅう)ブランド」として認められ、北海道の空港でのお土産として、また都内有名デパートの贈答用商品としてご愛顧頂いております。「練たまり干し」は、平成22年度と平成24年度の「後志水産加工品ブランド品評会」において、それぞれ「優秀賞」を、「王様のうに」は平成30年度の「第3回小樽水産加工グランプリ」において「銀賞」を、

「ホタテdeポン」は令和3年度の「第4回小樽水産加工グランプリ」において「金賞」を頂きました。これからも安心・安全な商品をお届けするため、自社基準のもと徹底した衛生管理ならびに定期検査を実施。一生懸命笑顔で、たらこ・数の子・いくらなどの魚卵にこだわり続け日本食の伝統を守ってまいります。お米の脇役ではありませんが、舞台にはちよつと唸らせる脇役が必ず必要です。日本食という舞台で北海道という味を添えていきたいと思っております。

有限会社入久三浦水産

〒047-0047
小樽市祝津2丁目237番
【TEL】0134-25-7535
【FAX】0134-25-7536
【HP】<https://miurasuisan.com>

●沿革

明治26年 初代・三浦喜兵衛が秋田県より来道
明治43年 小樽市祝津にて創業
昭和11年 2代目淳二郎に代替わり
昭和54年 有限会社入久三浦水産設立。
3代目喜一が社長に就任
平成元年 新工場落成し現在に至る



代表取締役
三浦 一浩

小樽の女性を輝かせて111年 稲穂町で続くKOMACHIYA化粧品店

創業

1911年

明治44年

有限会社 小町屋



小町屋商事株式会社社屋（昭和38年8月15日竣工）



小町屋小売部（昭和20年頃）



創業者 佐藤鉄太郎

資生堂加盟店 小樽第一号店

初代・佐藤鉄太郎が稲穂町にて「小町屋かもじ店」を創業したのが当店の始まりです。大正7年、現在地へ移転し、大正12年に2代目彦彌が事業を継承。昭和3年に、小樽で初めての資生堂チエーンストアとなりました。昭和22年「小町屋商事株式会社」を設立し、3代目功が社長に就任するとともに卸売業を始めます。昭和38年に社屋を竣工するも、6年後に卸売り部門は他社と合併。もとの化粧品販売専業へと戻ります。平成に入り、3代目功の長女の婿が病気で倒れたため、閉店の危機に直面しますが、縁があつて親族以外の本田純子が5代目として事業を継承するに至ります。

KOMACHIYAならではのサービスを提供

以来今日まで、地元密着型の化粧品店として小樽で親しまれてまいりました。当店ではドラッグストアなどでは手に入らないブランドを多数そろえ、上級のスキルを取得したビューティーアドバイザーがお客様ひとり一人に合った「キレイ」を引き出すため、じっくり丁寧にカウンセリングを行います。お肌の水分・油分を機器測定し、

肌に合ったサンプルもご用意いたします。また各種エステメニューも充実。フルコースエステ、デコルテネックマッサージ、超音波ほかフルメイク、眉スタイリングなど豊富な美容サービスを取りそろえ、スタッフ一同皆様をお待ちしております。

有限会社小町屋

〒047-0032
小樽市稲穂2丁目2番7号
【TEL】0134-23-3014
【FAX】0134-33-9116
【HP】<https://komachiya-otaru.com/>

●沿革

明治44年 初代・佐藤鉄太郎が稲穂町にて創業
大正 7年 現在地へ移転
大正12年 2代目彦彌が事業継承
昭和 3年 小樽資生堂チエーンストア第一号店加盟
昭和22年 法人化し小町屋商事株式会社設立
3代目功が社長に就任
平成16年 5代目本田純子が事業継承



代表取締役
本田 純子

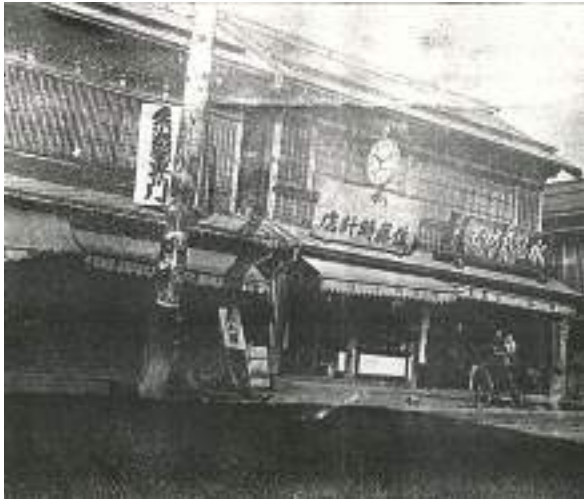
琥珀色の水晶あめ玉一筋 愛され続ける昔ながらの味

創業

1911年

明治44年

澤の露本舗



稲穂町東六丁目(第一大通) (大正12年)



澤の露



小樽名物当選の賞状 (大正9年)

111年続く伝統のひと露

当店は明治44年、菓子職人であった初代・澤崎浅次郎が創業して以来、水飴を使用せず、砂糖だけで仕上げる透明度の高いあめ玉「澤の露」一品だけを製造、販売しております。

浅次郎は明治43年に福井県から来道。同郷の人々の助けを借り開業の相談や、原料である砂糖の卸問屋の紹介を受けるなどして、翌年の創業へと至りました。当初は「水晶飴玉 衛生堂」という店名で、その素朴な味わいで多くの人に親しまれるようになりました。しかし戦争中、砂糖の入手が困難になったときは一時休業となりましたが、その後、昭和26年に現在の店名「澤の露本舗」に改め営業を再開。2代目、3代目と引き継がれ現在は4代目が修行中です。

一子相伝で続く唯一無二の技

現在販売されている一般的な飴は、水飴を使用し甘味料を加えるため、甘みがかなり強いのですが、当店は水飴不使用。着色料、保存料も加えていないので口当たりの良い自然な甘さをお楽しみ頂けます。工程は手作業で丁寧に、砂糖のコゲひとつ無い

ようツヤを出し透明に仕上げる当店の製法はほかに類が無く、自身の修行には10年の月日を要しました。これからも明治からの伝統を守って手作りにこだわり、飾って見て喜び、口に入れた甘さに喜び、喉と身体の健康に喜ぶ3つの幸福を届けていきたいと思えます。

澤の露本舗

〒047-0024
小樽市花園1丁目4番25号
【TEL】0134-34-1606
【FAX】0134-34-1606
【HP】<https://otaruaame.com>

●沿革

明治44年 初代・澤崎浅次郎が水晶飴玉衛生堂を創業
昭和26年 店名を澤の露本舗に改める
昭和30年 高久信夫(初代の長女の夫)が2代目を引き継ぐ
昭和38年 第1回小樽優良みやげ品で表彰を受ける
平成 2年 高久文夫が3代目として引き継ぐ
令和 3年 高久模夫が4代目として修業中



代表者
高久 文夫

変化する小樽を 豊富な機械と経験で支え続ける

創業

1911年

明治44年



会社前道路にて(昭和30年代後半の国道5号線)



狩勝峠にて(写真右が杉本正一)

株式会社

杉本運輸

「運ぶ」から広がった役割

当社は明治44年、馬車による運搬業務を始めたのが創業のきっかけです。小樽市は、明治から昭和初期にかけて北海道の玄関口として目まぐるしい経済発展を遂げていきました。その急激な時代の変化に合わせて、昭和25年に法人化。以降、戦前からゴム工場を中心とした工業地帯であった奥沢地区を拠点に、地元企業様などから運搬および機械設置などを受けておりました。

建設業務で街づくりに貢献

当社は経済都市から観光都市へと変化していく小樽に、運輸と建設を軸に貢献をしてまいりました。昭和41年にクレーン車を導入、昭和43年にはプラント工事をメインに一般建設業へと事業を拡大しました。現在までの間に大型クレーンも導入し、業務体系を充実していき、平成11年開業の「マイカル小樽(現ウイングベイ小樽)」建設工事時には、全てのクレーン工事を当社が担いました。平成24年には3代目守巧が、経済社会の発展寄与が特に大きい企業の最高責任者に贈られる『旭日中綬章』を授章。「誠実・安全・技術」を信念に、100年

先もお客様と地域とともに歩む企業となるべく邁進をしております。

株式会社杉本運輸

〒047-0013

小樽市奥沢4丁目17番12号

【TEL】0134-23-6201

【FAX】0134-23-6205

【HP】<https://www.sugimotounyu.co.jp>

●沿革

- 明治44年 運搬業務開始
- 昭和25年 杉本正一が合名会社杉本組設立
- 昭和33年 有限会社杉本運輸を設立
- 昭和38年 杉本守巧社長就任
- 昭和43年 株式会社杉本運輸設立
- 平成27年 杉本憲昭社長就任



代表取締役
杉本 憲昭

戦争や大火をくぐり抜けて 110年続く街の老舗理容店

創業

1913年

大正2年

理容マリモ



中央が2代目ハツ



小樽理容師協同組合創立120周年記念式典・祝賀会
(平成12年)



現在の店内



小樽市優良技能者表彰式
(前列左から4人目が秀司/平成24年2月)

水槽に沈むマリモが店名に

私の祖父はある日「満州へ行ってひと旗揚げてくる」と言ったときり帰ってこず、祖母小林タキは働き手を失くしたため、奥沢に「小林理髪店」を開業。娘のハツと入婿の先雄とともに店を始めたのが創業時の工ピソードです。その後、戦争を機に市から強制疎開を求められ現在の新富町へ移転。ここは昔の長屋で、当時戦争に行つて空いていた中島さんの理髪店があったところでした。心機一転、店内に飾ったマリモにちなんで店舗名を変えました。そこは建具屋、家具屋が続く長屋で、よく火が出て大火事を5回も経験しました。そのうち2回はすぐ隣まで火の手が迫りましたが、幸運なことに焼けずに残り今に至っております。

小樽市優良技能者に選ばれる

私は昭和16年生まれで、床屋の息子として昼間は理容学校へ通い、夜は当時の小樽商大短期大学で勉強をし、自宅修行を経て3代目として跡を継ぎました。若い頃から日夜諸先輩方々のご指導を受けてきたおかげもあり平成24年には、小樽市優良技能者として表彰を受けました。北海道理容生

活衛生同業組合小樽支部にも長く所属していますが、市内でも100年以上続く店舗はもう数軒しかありません。残念ながら当店の後継者はおりませんが、自分の体力が続く限り、さらなる技能の向上を目指し、できる限り努力してまいりたいと思っております。

理容マリモ

〒047-0004
小樽市新富町10番19号
【TEL】0134-23-2922

●沿革

- 大正 2年 小林タキが小林理髪店開業
- 昭和20年 強制疎開により現在地へ移転し理容マリモに改名
- 平成 2年 秀司が組合に開設届け提出
- 平成24年 秀司が小樽市優良技能者として表彰され受賞者代表の挨拶を行う



店主
小林 秀司

街の医療体制整備に寄与 市民の健康に医薬品で貢献

創業

1914年

大正3年

株式会社

岡島商店



小売部門の創業当時の建物



卸部門の店前(昭和34年)



創業者 岡島元治郎

学校薬剤師の基礎を作る

創業者・岡島元治郎は明治21年愛知県に出生。その後、来道しました。明治43年、医薬品卸売店に入社。大正3年11月に独立し医薬品卸売小売業を主とする、**岡島商店**を色内町に開業したことが当社の始まりです。後に製造業3社を子会社として経営、昭和3年6月より小樽薬剤師会第4代会長に就任しました。その2年後、奥沢小学校で誤薬事件が発生。発熱した生徒に教師がアスピリンと間違ひ昇汞(塩化第一水銀)を飲ませ生徒が亡くなるという痛ましい事件が起こりました。この一件をきっかけに各学校に薬剤師を配置するよう、市から小樽薬剤師会会長であった元治郎へ委嘱状が出されました。元治郎は責任者として人選から内容の制定など、その実行と人材育成に奔走。昭和12年に会長を勇退しました。

医薬品の供給を通して街に貢献

卸売事業部では市立小樽病院、国立療養所小樽病院ほか、市内中小病院および開業医院を取引先とし、小中学校には児童接腫用インフルエンザワクチンなどを納入しておりますが、平成元年に協業企業に卸売

部門を譲渡。その後は現住所にて、一般医薬品小売業および不動産賃貸業を行い今に至ります。これからも市民のみなさまの健康のために医薬品を取り扱い、街に貢献してまいります。

株式会社 **岡島商店**

代表取締役 岡島 彰宣

〒047-0031

小樽市色内1丁目6番16号

【TEL】0134-22-2044

●沿革

- 大正 3年 初代・岡島元治郎 **岡島商店**開業
- 昭和 3年 小樽薬剤師会第4代会長に就任
- 昭和12年 小樽薬剤師会会長を勇退
- 昭和44年 2代目直宣社長就任
- 平成元年 秋山愛生館に卸売業部門を無償譲渡
- 平成 5年 3代目章社長就任
- 令和元年 4代目彰宣社長就任



挑戦を続け集めた支持 市民から愛される蒲鉾

創業

1914年

大正3年

株式会社 大八栗原蒲鉾店



樽みこし（大正12年 当社店舗前）
当社が始めた“樽みこし”は小樽全体に広がり、平成9年頃まで続いた



代々伝わる石臼ですり身をすり上げる



復古版宗八入角焼

「かま栄」で修行した初代

初代・栗原八郎は明治38年、群馬県から小樽に移住。1年後、現在の「かま栄」の創始者、芝栄吉氏のもとで蒲鉾作りを学びその腕を認められ、大正3年に独立。現在の住所にて「大八栗原商店」を開業しました。戦後の物が無い時代、魚は統制経済から除外されていたため蒲鉾店はとても繁盛し、この時期は市内だけで60軒以上が乱立していました。高度経済成長に突入すると、保存料が出回り販売範囲が広がったことで、大量生産と価格競争の時代へ。その流れに対抗すべく、2代目清も奮闘しますがなかなか結果に恵まれません。昭和58年に3代目康が25歳で代表に就任。本店の向かいにある入船市場に2号店を開き、ようやく賑わいを取り戻しました。

熱心な商品開発が実を結ぶ

当社は丁寧な仕事と味で差別化をはかるため、デンプン量や原料を見直すなど地道な商品開発を続け、当社が開発した商品は数々の品評会で高い評価を頂いております。近年では、「復古版宗八入角焼」が、平成26年「第1回小樽水産加工グランプリ」

にて金賞を、また全国蒲鉾品評会において平成27年「水産庁長官賞」、平成28年「農林水産大臣賞」を受賞しております。北海道において、無でんぷん蒲鉾を製造しているのは当社1社だけです。高度な製造技術が必要としますが、ほかにはない味わいを守り、伝統の高級蒲鉾を今に伝えております。これからも、みなさまに喜んでいただける蒲鉾づくりを続けてまいります。

●沿革

明治38年 初代・栗原八郎、群馬から北海道に移住
明治39年 八郎、かま栄入社
大正 3年 現在の住所にて大八栗原商店を開業
昭和45年 有限会社大八設立
昭和58年 3代目康が代表取締役社長に就任
平成16年 南樽市場店開店
平成26年 第1回小樽水産加工グランプリ金賞受賞
平成27年 全国蒲鉾品評会水産庁長官賞受賞
平成28年 全国蒲鉾品評会農林水産大臣賞受賞

株式会社大八栗原蒲鉾店

〒047-0021

小樽市入船1丁目11番19号

【TEL】0134-22-2566

【FAX】0134-22-2577

【HP】 <https://www.dai8kurihara.net/shop/>



代表取締役
栗原 康

利用者の信頼に応え続ける 豊富な専門知識と品揃え

創業

1916年

大正5年



看板 (年代不明)



小樽商工名鑑 (昭和29年版)

有限会社 フレンド商会

自転車・バイクから除雪機まで

大正5年、初代・本間常吉が稲穂町で開業。商売の心得を「信用を大切にするとし、自転車、リヤカーの販売修理、船舶エンジンの修理業を始めました。その後、船舶エンジンの修理業は時代の流れと共にオートバイの販売修理に変わっていきました。終戦後、昭和28年に有限会社として法人化。その後、常吉が亡くなり、四男の孝利が事業を継承。昭和60年から除雪機などの販売修理を始め、その3年後に現在の住所である色内に店舗を移転しました。平成28年には有志のお客様から創業100年の祝賀会を開いていただきました。

市民の足回りを守る仕事

当店は従業員全員が自転車安全整備士の資格を持ち、修理、整備を行っております。子供用からスポーツ用、坂の街小樽で人気の電動アシスト自転車など幅広く展示しており、メーカーは23社以上を取り扱っております。バイクは原付バイクからスポーツバイク、ほかにヘルメットなど備品も豊富です。メンテナンスは二級整備士の資格を持つサービスマンが行っております。

有限会社フレンド商会

〒047-0031

小樽市色内2丁目18番14号

【TEL】0134-22-7622

【FAX】0134-22-9092

【HP】<http://www.friend-otaru.com>

●沿革

- 大正5年 初代・本間常吉が稲穂町でフレンド商会を開業
- 昭和20年 オートバイの販売修理を開始
- 昭和46年 代表者が本間常吉から孝利に変更
- 昭和60年 除雪機および汎用品の販売修理を始める
- 昭和63年 所在地を色内2丁目18番14号に移転
- 平成21年 代表者が本間孝利から正人に変更
- 平成28年 有志により100周年祝賀会が開催される

除雪機、移動式融雪機も各メーカーから、ご要望に合うものをご提案します。長年の経験と技術で、市民のみなさまの快適で安全な足回りをサポート。いつまでも地元のお客様に安心してご利用いただけるよう、豊富な品揃えと充実したアフターケアを心がけてまいります。



代表取締役
本間 正人

心和ます懐かしい味を全国に 道産の甜菜糖を使った小樽の飴

創業

1918年

大正7年

飴谷製菓

株式会社



現在、工場の前で飴を直販している屋台



昭和20年代の工場前（稲穂5丁目）



2代目忠男と親族
(昭和20年代)



新機械の前で2代目忠男と3代目佳一（昭和30年代）

飴一本に絞り広げた販路

富山県の「飴屋六兵衛本舗」に生まれた初代・飴谷次治は、明治24年に小樽に渡り、大正7年に菓子製造販売業を創業しました。その当時は飴以外にも菓子を作っており、小樽市内の市場などに卸していました。昭和28年2代目忠男の代より飴商品に特化し、機械設備などを導入したことにより量産化。販売規模を北海道全域と青森県に広げ、昭和53年には家業に戻った3代目佳一がそれを全国にまで広げました。また、さまざまな味の種類やOEM商品の製造も始め、現在に至ります。

屋台の直売で観光客を笑顔に

飴製造メーカーとして卸売専門で営業を続けてきた一方、小樽がだんだんと観光都市として再度発展。運河観光の人力車が工場前を通るようになり、民泊施設も増えたことから平成11年より工場の前に屋台を作り、直販を始めるようになりました。昔の駄菓子屋をイメージした木製屋台は大変好評で、国内外のお客様が気軽に立ち寄り、頂けるようになりました。現在屋台では、飴の中に練りあんが入った「雪たん飴」や

定番の「バター飴」をはじめ、合計15種類の飴を販売しており、その他40種類の飴を全国に出荷しております。北海道の甜菜糖と小樽の水で作ったおいしい甘さの飴を、今後も市内、旅行者、全国の皆さまに楽しんで頂けるよう続けていきたいと思っております。

飴谷製菓株式会社

〒047-0031
小樽市色内2丁目4番23号
【TEL】0134-22-8690
【FAX】0134-24-0371

●沿革

- 大正 7年 初代・飴谷次治が小樽にて菓子製造販売業を創業
- 昭和27年 会社設立
- 昭和28年 2代目忠男代表取締役社長就任
- 昭和48年 第18回全国菓子大博覧会大臣賞受賞
- 昭和52年 工場を色内に移動
- 平成 5年 3代目佳一代表取締役社長就任



代表取締役社長
飴谷 佳一

創業当初の趣を残す店舗と 職人の味を伝える老舗菓子店

創業

1918年

大正7年

有限会社

奥村松月堂



当社に現存する一番古いと思われる写真
(昭和初期頃)



マロンどら焼き
小樽地鶏の卵を使った皮で道産小豆の粒あんと栗を包んだ当店の看板商品



小樽美人潮(しお)どら焼き
小樽商工会議所の小樽・後志の食材を使用するプロジェクトとのコラボ商品

名門菓子店から独立し創業

大正時代の面影を残す店舗で、創業以来菓子製造・販売しております。初代・奥村教造は、越後国新発田藩の御用菓子舗で北海道最古の企業だった「杉本花月堂」の工場長を勤めていました。独立にあたり、当時の社長から「花月堂」の「花」を「松」としてはどうかとの言葉をもらい、店名を「松月堂」として店を開いたそうです。初代は「食べ物はずいぶん」とよく言っていたそうで、菓子作りは大変厳しい人だったと伝えられています。

創業は緑町で、昭和9年には花園町に移転して店名を「西洋軒」と変更。その後再び緑町に移り、第二次世界大戦が始まると企業統制となりました。昭和30年には「有限会社松月堂」として会社を設立。昭和58年には店名を「杉本松月堂」として現在地に移転、のちに社名を「有限会社奥村松月堂」と変更し、今に至っています。

保存料不使用のお菓子作り

菓子作りに対する創業者の思いは、100年以上の時間が過ぎた今も大切に守り続けています。すべての菓子は一つひとつ

手作りし「お菓子は日持ちしないのが自然」という伝統を守り、保存料を一切使用しないことを徹底しています。看板メニューの「生どら焼き」は、道産小豆と生クリームを使い独自の製法で作り上げた一品。おかげさまで小樽土産としても、贈答用としても愛される商品となっております。

有限会社奥村松月堂

〒047-0032
小樽市稲穂1丁目8番12号
【TEL】0134-32-2220
【FAX】0134-34-0188
【HP】<https://otaru-shogetsudo.com>

●沿革

大正 7年 和菓子製造販売を開始
昭和 9年 花園町に移転し西洋軒とする
昭和21年 戦後松月堂として再開
昭和30年 有限会社松月堂設立
昭和58年 店名を杉本松月堂に変更、
現在地に移転
平成13年 社名を有限会社奥村松月堂に変更



代表取締役
奥村 秀幸

歴史に培われた豊富な 専門知識の提供を目指す

創業

1918年

大正7年

小樽船用品 株式会社



正月の社員集合写真(昭和35年頃)



2代目 北村外吉



3代目 北村猪之助



運河通りの社屋(昭和40年初頭)

戦争の世紀をくぐり抜けて

当社は、金沢から明治35年に小樽に渡り、海運会社に勤務していた初代・北村判之助が立ち上げた船用品専門会社です。判之助は、大正7年に「合資会社北村船具店」を設立し、小樽港に入港する汽船や作業船、解、筏、漁船などを対象にした船具販売を始めました。昭和10年に代表が北村外吉に交代しましたが、外吉の時代は多分にもれず戦争の影響を大きく受けました。戦時統制で北海道内の船具商が一括され北村船具店も中核会社として合流。戦時下は、物資の配分が太平洋側に比べて少なく、ロープや錨などが入手困難だったと聞いております。外吉も日中戦争、太平洋戦争と出征しましたが、戦後、復員することができ戦時統制時に分社されていた「小樽船用品株式会社」に代表として復職したそうです。

“正直な商売”をモットーに

その後、代表の交代や昭和36年に稚内営業所を開設し平成30年に閉所したこと、平成9年には小型船舶造修資格を取得したこと、平成29年に運河通りから移転したことなどさまざまなできごとがありました。こ

れまで営業を続けて来られたのは、創業時から“正直な商売”を心がけてきたためだと考えています。これからも、長い歴史で培った知識と豊富な商品情報を、お客様に提供し必要とされる店として続けてまいります。

小樽船用品株式会社

〒048-2671

小樽市オタモイ1丁目8番地1号

[TEL] 0134-64-7011

[FAX] 0134-64-7018

●沿革

大正7年 合資会社北村船具店を初代・北村判之助が設立

昭和10年 代表を北村判之助から外吉に変更

昭和16年 戦時統制により北海道船用品統制販売会社発足

昭和18年 分社により小樽船用品株式会社発足

昭和51年 代表を北村外吉から猪之助に変更

平成30年 代表を北村猪之助から三上恭弘に変更



代表取締役
三上 恭弘

原田歯科診療所から親子4代 緑町の老舗歯科医院

創業

1918年

大正7年

医療法人

原田歯科医院



現在の医院入口



古い原田歯科玄関前の2代目(右)と3代目(中央) 昭和47年 小樽祭り



初代 原田文人

昭和63年現住所へ医院を新築

医師を父親に持つ初代・原田文人は、東京歯科医学院で学んだのち大正7年、花園町に「原田歯科診療所」を開業しました。大正12年、同じ花園町辰巳通りに移転。昭和10年には、2代目正永が緑町に分院を開業し、花園町の本院と合わせて2院となりました。昭和49年には、3代目院長に嘉人が就任。昭和63年、それまで木造家屋の一部を医院としていた場所から2軒先、現在の場所に新たな鉄筋コンクリート造りの医院を新築しました。3代目が経営していた昭和のころは小樽の歯科医院の数が、人口に対して少なく、昼休み返上で、夜も遅くまでひっきりなしに訪れる患者さんの診療にあたっていました。

現在は口腔外科治療にも対応

親子代々、小樽の老舗歯科医院として小樽商大の校医や小樽市歯科医師会理事などを務め地域医療に貢献してまいりました。4代目院長雅史は、日本歯科大学を卒業後、札幌医科大学医学部付属病院の歯科口腔外科などに勤務経験があり、(社)日本口腔外科学会認定の口腔外科専門医でもあ

ります。手稲溪仁会病院歯科口腔外科に非常勤としても勤務しています。現在は一般歯科、小児歯科、インプラントのほか3D立体画像から分析できる歯科用CTを導入するなど最新の設備をそろえ、親知らずの抜歯、外傷(口のけが)、顎関節症など口腔外科治療にも対応。85歳の3代目も現役で診療にあたっております。

医療法人原田歯科医院

〒047-0034
小樽市緑1丁目5番7号
【TEL】0134-22-5668
【FAX】0134-22-5668
【HP】<https://harada-dentalclinic.info/>

●沿革

大正7年 初代院長・原田文人が花園町に開業
大正12年 同じ花園町内で移転
昭和10年 2代目正永が緑町に分院を開業
昭和49年 3代目嘉人が院長に就任
昭和63年 現在の場所に医院を移転新築
平成19年 4代目雅史が院長に就任
平成27年 医療法人原田歯科医院に変更



理事長
原田 雅史

Hグレード鉄工所を誇りに 小樽の歴史とともに歩む

創業

1919年

大正8年

株式会社 大川鉄工所



第二製品置場



作業風景



初代 大川 元蔵



2代目 大川 元一



3代目 大川 紘司



改修後の高島工場内

鍛冶屋から工場規模を広げる

初代・大川元蔵は新潟の出身で、明治後期に出稼ぎのため小樽に移住。手宮にあった硝子屋で修行後、大正8年に豊川町で「大川鉄工所」を創業。船の碇や生活の金物を制作する鍛冶屋を営みました。昭和10年に2代目元一が代表に就任。その後、工場は石山町から色内町へ移転。建築鉄骨の加工、溶接、塗装から納品、組立までを一貫して行う企業に成長し、平成10年には高島へ再度移転。平成17年に小樽で唯一、北海道でも数少ないHグレード鉄骨製作工場の大正認定を受けました。それは3代目紘司の念願でもありましたが、そのころには小樽に5社あった鉄骨製作工場は、当社含めて2社が残るのみでした。

Hグレード取得は3代目の悲願

Hグレードの認定をいただいたことは、会社の信用と安定経営を支える大きな力となりました。平成30年に創業100周年を迎えることができたのは、自らが過去の概念に捕らわれない発想を継続し、社員・熟練の職人たちとともに切磋琢磨してきたから。現在の業務は重量鉄骨、軽量鉄骨工事

の設計施工、建築鉄骨工事、建築金物工事など、幅広く「まちづくり」に関わっております。これからも今まで以上に製品・スピード・チームワークの充実をはかり、時代に合った製品、会社づくりを目指し次の100年につなげていこうと思います。



〒047-0048
小樽市高島1丁目2番1号
【TEL】0134-22-6048
【FAX】0134-29-0568
【HP】<http://okawa-t.com/>

●沿革

大正 8年 初代・大川元蔵が大川鉄工所を創業
昭和12年 石山町に移転
昭和46年 2代目元一が代表取締役役に就任
昭和47年 色内町に移転
平成 2年 3代目紘司が代表取締役役に就任
平成17年 高島町に移転。Hグレード取得
平成26年 4代目晃弘が代表取締役役に就任



代表取締役
大川 晃弘

バイクのおもしろさを 伝えるショップを目指して

創業

1919年

大正8年



旧店舗 (平成20年)



現在の店内

ホンダドリーム小樽 株式会社ホンダモーター 金ヶ崎商会

自転車店から二輪車販売店へ

当社は、大正8年に自転車の販売店から始まった会社です。創業者の金ヶ崎元吉が明治中ごろに商売を立ち上げたと言われています。

昭和に入るとオートバイの市場拡大に促されるため「本田技研工業」(以下ホンダ)のオートバイを販売し、総代理店となりました。昭和39年には、ホンダが軽四輪車を発売したことにより四輪車の代理権も取得。四輪車需要の高まりとともに工場も増設し、商売が拡大していきました。その後、ホンダの方針により四輪部門は別会社になり、当社にて二輪特販事業部を設けることになりました。

バイクの魅力の発信拠点に

平成17年には汎用機(除雪機)特約店になり、その2年後には「ホンダドリーム小樽」と店舗名を変更し、建て替え。夏はオートバイの販売、修理、点検、車検など、冬は除雪機の販売を行うようになりました。「ホンダドリーム小樽」には、地元の方はもちろん、道内各地からお客様が来店されています。夏にはツーリング中のお客様の

修理のご相談にのることもあります。訪れるお客様にオートバイの魅力を発信すること、そしてご希望のカスタムにお応えして、喜んでいただくのが私たちの使命だと考えています。

ホンダドリーム小樽 株式会社ホンダモーター金ヶ崎商会

〒047-0021

小樽市入船1丁目6番19号

【TEL】0134-24-1375

【FAX】0134-32-1774

【HP】<https://www.hondamotor.co.jp/>

●沿革

- 大正 8年 金ヶ崎元吉が自転車販売店を開業
- 昭和32年 オートバイ販売のため有限会社を設立
- 昭和35年 本田技研工業株式会社の代理店となる
- 平成11年 増資により株式会社に組織変更
- 平成17年 本田技研工業株式会社の汎用機特約店となる
- 平成19年 ホンダドリーム小樽を開設する



代表取締役
金ヶ崎 義弘

「強くて履き良い」伝統の長靴製品 守り続けるミツウマブランド

創業

1919年

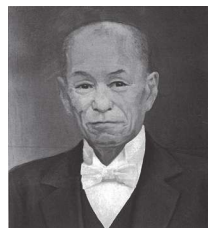
大正8年



1953(S28) 本社を奥沢町に新築



社旗マーク



創業者・初代代表社長 中村 利三郎

株式会社ミツウマ

初代がゴム底付き地下足袋を考案

3頭の馬の顔が並ぶマークでお馴染みのミツウマ。創業は、富山県の織維問屋「戸出物産」の初代小樽支店長だった、中村利三郎の思いつきからでした。それは、店で扱っていた地下足袋の裏に、滑り止めとしてゴムを貼り付けている人がいることを知り、ゴム底付き地下足袋を考案。ゴム靴製造へと発展させ、雪国の履物事情を一変させました。昭和初期には本州各地にまで販路を拡大。「強くて履き良い」ゴム長靴を主力として成長し、戦中戦後を生き延びるも、昭和58年以降は、韓国や中国などからの安価輸入品に押されます。その後いくつかの危機を乗り越えながら、令和元年には創業100年を迎えるに至りました。

長年の蓄積とゴム質へのこだわり

当社は、長年蓄積されてきたノウハウに加え、丈夫さ・軽さ・柔らかさに特化した長持ちする製品をラインナップ。「長靴はやっぱりミツウマだね!」と全国各地の一次産業をはじめ一般ユーザーの方々に支持をいただいております。インターネット販売も始め、また当社製品をずらりと並べた

実店舗、小樽ミツウマ専門店「ながづつ屋おたる」や札幌「長靴のミツウマ」も大きな話題となりました。軽さとファッション性を兼ね備えたレインブーツ、アイスバーンでも滑りにくい長靴など、さらなる向上を目指してこれからも開発を続けてまいります。

株式会社
ミツウマ

〒047-0013

小樽市奥沢4丁目26番1号

【TEL】0134-22-1111

【FAX】0134-22-1110

【HP】<http://www.mitsuuma.co.jp/>

●沿革

- 大正 8年 北海道護謄工業合資会社として発足
- 昭和 5年 ミツ馬護謄工業合資会社と改称
- 昭和36年 ミツクロン化学工業株式会社を合併
- 昭和49年 株式会社ミツウマと改称する
- 平成21年 小樽工場でのゴム長靴・引布生産終了
- 令和元年 創業満100年
- 令和 2年 9代目大東藤男代表取締役社長に就任



代表取締役社長
大東 藤男

北海道の暮らしを 燃料で支え続ける老舗企業

創業

1920年

大正9年



昭和10年に小樽で初めてのA重油タンク(200kl)2本を建設

河辺石油

株式会社

教員を辞め日石へ転職した初代

当社は創業102年、北海道最古の「油屋」と自負する老舗企業です。その始まりは、静岡県三島市に生まれた初代・河辺亮吉にさかのぼります。亮吉は、東京高商(現一橋大学)を卒業し、明治40年に小樽木材の管理職としての就職が決まり、この地へとやってきました。しかし、そこが1年足らずで倒産。職を失った亮吉はその経歴から町の人々に請われ、小樽商業(現北照高校)の教員になりますが、その約7年後の大正3年、日本石油に入社。大正6年に日石北海道営業所長として手稲に赴任し、大正9年に独立し「河辺商店」を創業しました。

圧力容器から発展した製品群

創業当時は灯油のほか、なたね油やごま油を売っていましたが、大正15年、ライジングサン社(現シエル石油)の特約店になって以降は船舶燃料を扱うようになりました。昭和10年代には、函館・小樽を基地とする北洋船が活況を呈し、亮吉は重油タンク2基を設置。のちに給油船も導入し港町の商いで成長を遂げました。

現在はモーターゼーションの流れに則し

たガソリン、軽油、車両販売、レンタカーなど車関連事業も展開。ホームサービスとして灯油配送や灯油タンクの設置や洗浄、ストープ修理・分解を行うなど、地域密着型企業としてさらなる永続のため企業努力を続けております。

河辺石油株式会社

〒047-0032
小樽市稲穂2丁目19番8号
【TEL】0134-24-1345
【FAX】0134-24-1344

●沿革

大正 9年 初代・河辺亮吉が河辺商店を創業
昭和24年 シエル石油・昭和石油と特約契約
昭和26年 河辺石油株式会社を設立
昭和30年 2代目舜一が代表取締役社長就任
昭和60年 3代目由清が代表取締役社長就任
平成31年 出光興産と特約販売店契約
令和 2年 創業100周年を迎える



代表取締役会長
河辺 由清

小樽印刷業界の老舗 北海道開拓の歴史とともに発展

創業

1920年

大正9年



昭和9年 国鉄小樽駅時刻表 (木版刷)



左 初代 與吉 右 2代目 政央



納品物

北斗印刷 株式会社

開拓使により広がった印刷

北海道の近代的な印刷は、明治8年、開拓使函館支庁に道内初の活版印刷機が導入されたことを起点とし、明治9年の札幌活版所、15年の根室活版所の開設と続くように、開拓使により広がり、北海道開拓の歴史とともに発展してきました。当社の始まりは明治35年。富山県より来樽した、現3代目吉田政司の祖父、初代・吉田與吉にさかのぼります。與吉は「山藤活版所（現在の山藤三陽印刷）」初代社長・山藤敬助氏に誘われ、印刷所に勤務しておりました。

戦後は小さな印刷機で再興

その後、小樽の「塩野其水堂」にて文選や植字、印刷工として勤務したのち、大正9年、稲穂町に北斗印刷所を設立。昭和18年の戦中には、企業整備により大型活版印刷機2台を国へ抛出。従業員には退職してもらい、残った小さな手動式の平圧印刷機で生計をまかなうため八ガキなど細かな印刷を手掛けていました。戦後は文具や書画材料の販売も行いながら再興し、昭和28年には小樽市役所を退職した吉田政央が入社。株式会社を改組します。昭和57年には

3代目政司が引き継ぎ今に至ります。高度な情報化などによって、印刷業界は今、厳しい競争にさらされております。しかしこれからも印刷物製造にとどまらず、新しい時代を見据えながら、なお地域を大切にしたい印刷屋として成長していきたいと思っております。

北斗印刷株式会社

〒047-0032
小樽市稲穂4丁目6番2号
【TEL】 0134-32-2222
【FAX】 0134-32-2224

●沿革

- 大正 9年 稲穂町に北斗印刷所設立
- 昭和25年 戦後印刷業を再開。文具など販売も行う
- 昭和28年 吉田政央が入社
- 昭和31年 北斗印刷株式会社設立。政央が2代目となる
- 昭和49年 吉田政司が入社
- 昭和57年 3代目政司が代表取締役就任



代表取締役
吉田 政司

小樽の街と人の暮らしに 寄り添う“まちの花屋”

創業

1920年

大正9年

有限会社

山城屋生花店



昭和40年代頃の花園本店店内風景



昭和30年代頃の本店外観



初代 山城榮作 2代目 山城繁雄

始まりは夜店の花売りから

当社は大正9年に創業し、100年以上に渡り“まちの花屋”として営業を続けてきました。初代・山城榮作は20代半ばで小樽へ入植。植木職人として修業を積みましたが、冬になると仕事がなく収入が途絶えることから、市内の農家から仕入れた花を、花園公園通りで裸電球を灯したリヤカーの夜店で売り始めました。当時の花園地区は夜通し営業する映画館もあり、不夜城と呼ばれるほど活気のある場所。冬には本州から菊などを仕入れて、商売を軌道に乗せました。昭和7年ごろには、同じくリヤカーで花を売っていた三浦澄子と2代目繁雄が結婚。売上を伸ばして昭和28年には会社を設立。花園4丁目店で店を構えることになりました。繁雄は丁寧な対面販売を重視し、この経営方針は今も受け継がれています。

地域密着で暮らしに花を届ける

3代目重信は、婚礼需要に着目し地元資本の市場の仕事を一手に引き受けて事業を拡大。市内で3店舗を展開しました。しかし、4代目栄太郎のころには人口減少などの影響で生花需要が減少。逆風の中、令和

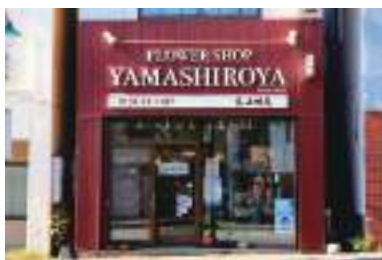
元年には財務体質を強化し2店舗体制への移行を決断。創業時からの地域密着の経営戦略も功を奏しコロナ禍の影響を最小限に食い止めました。これからも歴史に甘んじることなく前へ進んで参ります。

有限会社山城屋生花店

〒047-0024
小樽市花園4丁目4番地2号
【TEL】0134-23-1187
【FAX】0134-23-1188
【HP】<https://yamashiroya.easy-myshop.jp>

●沿革

大正 9年 初代・山城榮作が創業
昭和28年 有限会社山城屋生花店設立
昭和40年 JFTD (現花キューピット) 入会
昭和52年 国道拡張により本店を新築
平成 5年 朝里ホクレン店開業
平成17年 朝里ホクレン店移転
令和 2年 本店店舗改装



代表取締役
山城 栄太郎

小樽唯一温泉つきゲストハウス 「和の風」を併設する銭湯

創業

1921年

大正10年

有限会社

小樽大正湯



創業当時の建物



銭湯のエントランス (現在)



ゲストハウス入口 (現在)

大正時代に始まり現在5代目

「大正湯」という名前の由来は、大正時代から始めた銭湯だったからと聞いています。もとは、辻井さんという方が営業されていたそうです。そこへ、真狩で農業を営んでいた私の両親が、息子が農業を継いでくれることになったので、小樽へ出てきて風呂屋をやるうか、ということになったようです。それは、遠い親戚たちがすでに小樽で銭湯を営業していたこともあったと思いますし、施設があれば特殊な技術を持つていなくてもすぐに始められたからではないかと思います。私が主人と家業を継いだのは15年ほど前。今は息子も手伝っておりますが、5代目になります。

家族風呂をゲストハウスに改装

当店の湯は、緩和性低微湯泉の天然温泉で、適応症はリウマチ性疾患、神経症、神経麻痺などです。水中歩行や泳ぐことのできる大型の水風呂、スチームサウナ、打たせ湯などがあります。昭和59年ごろに施設を新築。家族風呂を併設し、長くやっておりましたが、平成29年にそこを「ゲストハウス和の風」としてリニューアル。1〜4

人部屋が複数あり、全室Wi-Fi完備・エアコン・暖房器具・冷蔵庫を設置しております。温泉つきゲストハウスとして、外国人観光客の皆様からも好評いただいております。観光客の他、出張・実習など連泊されるお客様が多く利用されております。

有限会社 小樽大正湯

代表 押川 愛子

〒047-0024

小樽市花園4丁目14番15号

【TEL】0134-23-1893

【FAX】0134-61-7161

●沿革

大正10年	大正湯創業
昭和47年頃	八田豊治が引き継ぐ
昭和50年頃	有限会社小樽大正湯に改組
昭和59年頃	施設新築
平成17年頃	押川愛子が引き継ぐ
平成29年	ゲストハウス和の風オープン



地域住民の揺るがぬ信用 北海道最大の信用金庫

創業

1921年

大正10年

北海道信用金庫



昭和29年 旧小樽信用金庫本店(現 小樽支店)

道央圏の核となる信用金庫へ

小樽においては、旧小樽信用金庫の前身である「有限責任小樽市街地信用組合」が大正11年に設立されて以来、100年を超える業歴を有しております。平成30年に道央圏を主要な営業基盤とする三金庫（札幌信用金庫、北海信用金庫、小樽信用金庫）が合併し「北海道信用金庫」に名称変更いたしました。合併後も小樽市を重要拠点のひとつとし、後志事業本部のほか市内に9カ店を構え、地域専門金融機関として、金融の円滑化・仲介機能の発揮に努めております。

地域経済発展に今後も尽力

当金庫は地域のみなさまから親しまれ、信頼される金融機関を目指し、積極的に地域経済の活性化へ貢献するとともに、地域密着型金融機関として、地域の発展に資する各種取り組みを積極的に実践してまいります。また、不変の最重要課題かつ喫緊の最優先課題であるコンプライアンス態勢の強化、顧客保護等の徹底、リスク管理態勢の構築・強化を進め「地域を守る」ための取り組みに全力を注いでまいります。そし

て「会員・お客様よし」「地域社会よし」「金庫・役職員（家族）よし」「環境よし」の経営を実践し「アワーズしんきんバンクの実現」を目指します。
長きに渡り当金庫を支援していただいている地域のみなさまに感謝申し上げますとともに、役職員一丸となつてこれからも業務に邁進してまいります。

●沿革

- 大正10年 有限責任山鼻信用組合 設立
(以下、旧小樽信用金庫のあゆみを抜粋)
- 大正11年 有限責任小樽市街地信用組合 発足
- 昭和26年 小樽信用金庫に改組
- 昭和46年 営業地区を石狩郡石狩町に拡張
- 昭和50年 日本銀行との当座取引開始
- 昭和52年 営業地区を余市町(ほか5地域)に拡大
- 平成14年 小樽商工信用組合 事業譲受
- 平成30年 三金庫合併、北海道信用金庫に名称変更

北海道信用金庫(小樽支店)

〒047-0032
小樽市稲穂1丁目4番10号
【TEL】0134-22-3121
【FAX】0134-33-1087
【HP】<http://www.shinkin.co.jp/hokkaido/>



理事長
佐藤 信明

道内でバスを走らせ1世紀 団結力で遂げた発展

創業

1921年

大正10年



大正11年頃の小樽市街自動車のバスと従業員
(小樽市・日銀支店前)



大正12年頃、小樽市街自動車で使用
していた15人乗りのフォードバス



昭和32年 小樽市内運行のバス

北海道中央バス 株式会社

青と赤の競合から同志へ

大正10年4月、後志地区最初のバス会社である「小樽乗合自動車合資会社」が設立され、青い車体から「青バス」と呼ばれ、また、その5か月後、同年9月、初代・最上吉蔵が有志と共に創業のルーツとなる「小樽市街自動車株式会社」を設立し、茶褐色の車体から市民に「赤バス」と呼ばれ、青バスと赤バスの2社は競合関係にありましたが、大正11年に両社の話し合いにより、「小樽市街自動車株式会社」を存続会社として合併しました。昭和7年頃、道央圏の石狩、後志、空知地区は同業者が多くその数は40業者を数え、全道一の乱立地帯でした。その後、昭和17年の戦時統合令により、空知地区を含む札幌地区21のバス事業者が、「小樽市街自動車株式会社」を母体とし統合、昭和18年3月に「北海道中央乗合自動車株式会社」を設立、昭和24年に社名を「北海道中央バス株式会社」に改称、現在に繋がります。

バスを中心として地域密着

現在は「中央バスグループ」16社で構成され、乗合バスを中心とした旅客自動車運送を基幹とし、建設、清掃・警備、不動産、

観光・旅行、飲食、介護福祉などの事業を幅広く展開しています。バス事業においては、輸送の安全の確保が事業経営の根幹であり、また、建設業をはじめその他の事業においても、安全・安心な商品・サービスの提供が基本であり、これらの社会的使命の下、地域社会に貢献する企業集団として地域社会と共に歩んでいます。これからもグループが連携し、弛まぬ努力を重ね、事業の発展と躍進を遂げてまいります。

●沿革

- 大正10年 4月、小樽乗合自動車合資会社設立
9月、小樽市街自動車株式会社設立
- 大正11年 両社合併
- 昭和18年 3月北海道中央乗合自動車株式会社を設立
- 昭和24年 社名を北海道中央バス株式会社に改称
- 昭和25年 札幌証券取引所に上場登録
- 平成17年 12代目平尾一彌代表取締役社長就任
(現代表取締役会長)
- 平成30年 14代目二階堂恭仁代表取締役社長就任

北海道中央バス株式会社

〒047-8601
小樽市色内1丁目8番6号
【TEL】0134-23-1111
【FAX】0134-23-1794
【HP】<https://www.chuo-bus.co.jp>



代表取締役社長
二階堂 恭仁

はじまりは食品缶製造。 飽くなき挑戦を続け、海外へ。

創業

1921年

大正10年

ホッカン ホールディングス 株式会社



日本経済新聞掲載広告(令和3年10月)

発展極めた小樽で見出した需要

大正10年「北海製罐倉庫株式会社」が設立され、食品缶詰用空缶の製造、販売ならびに倉庫業を開始しました。カニや鮭の缶詰製造を皮切りに、長期保存が可能な缶詰は日本の食卓はもちろん欧米諸国からも喜ばれ時代の花形産業となりました。創業時活動の拠点が小樽であった理由として、千島・樺太への缶詰需要の期待、道央の農畜産缶詰の空缶供給基地として好立地だったこと、汽船の燃料代として安価な石炭が入手可能だったことが挙げられます。

開拓者精神を持ち次の100年へ

昭和25年には「北海製罐株式会社(現ホッカンホールディングス株式会社)」として東京に本社を構え、東京証券取引所に上場。容器製造においてはその後もペットボトル、食品以外の分野を手掛けるとともに、充填事業、機械製作事業などに領域を拡大。さらにアジアなど海外へと事業を展開し、挑戦を続けてきました。

現在当社は、容器事業、充填事業、機械製作事業、海外事業の4つの事業における中核企業の本部機能を持ちながら、グルー

プ企業相互の連携を図っています。令和3年には創立100周年を迎え、今後も伝統の「ものづくり力」を活かしつつ、開拓者精神を持って求められるニーズに応え続けてまいります。

ホッカンホールディングス株式会社 (北海製罐(株)小樽工場)

〒047-0031
小樽市色内3丁目1番1号
【TEL】0134-25-1221
【FAX】0134-25-1227
【HP】<https://hokkanholdings.co.jp>

●沿革

- 大正10年 北海製罐倉庫(株)を設立
- 昭和25年 北海製罐(株)(現ホッカンホールディングス(株))を設立。本社を東京に設置。東京証券取引所に株式上場
- 平成17年 商号をホッカンホールディングス(株)へ変更し 純粋持株会社へ移行
- 令和3年 創立100周年を迎える。経営理念体系を刷新、グループロゴ・マークを統一



代表取締役社長
池田 孝資

創業者の想いを大切に 魚肉練り製品一筋100年

創業

1921年

大正10年

大ワ大和水産 株式会社



ちくわ製造ライン (2本の生産ラインを完備)



揚げ物ライン



細焼き竹輪

初代が開発した魚肉ウィンナー

当社は大正10年、創業者・植田俊一が日本で初めて魚肉ウィンナーを考案して以来、一貫して魚肉練り製品を作り続けています。植田は魚肉を腸詰にしたウィンナーを燻製にかけ、昭和初期、南サハリンから沖縄まで笹竹カゴにそれを包み、国鉄を使って出荷していたと聞いています。当時は大手水産会社が製造のノウハウを習いに来っており、植田はそれを独占せず、すべて教えておりました。それは彼の「食い扶持は自分で稼げ」という教えでもありました。そのような経緯で魚肉ウィンナーとは、今の魚肉ソーセージの前身であったわけです。現在当社は焼きちくわ、あげかまぼこを主体とし、風味かまぼこなど多種多様な商品を製造する企業へと成長しました。

美味しさと安心安全を求めて

私たちはその願いや築いた功績に敬意を払いながら、魚肉練り製品を独自に追及してまいりました。当社製品は他の食材の味を邪魔しないよう、薄味で味が浸み込みやすい製法で作られております。美味しいだけではなく、お客様に「安心・安全」な

商品をお届けできるよう、平成30年には食品安全マネジメント規格「JFS・B」の適合証明を受けるなど、環境に配慮した工場施設より全国各地への製品供給を行っています。今後は海外への販路拡大も視野に入れさらに努力を続けていきます。

大和水産株式会社

〒048-2671
小樽市オタモイ3丁目8番2号
【TEL】 0134-26-0001
【FAX】 0134-26-2557
【HP】 <http://www.otaru-daiwa.com/>

- 沿革
- 大正10年 初代・植田俊一が植田商店を創業
- 昭和36年 大ワ大和水産株式会社設立
- 昭和59年 3代目社長に小松幸春が就任
- 平成15年 4代目社長に金井俊幸が就任
- 平成29年 5代目社長に小松義幸が就任
- 平成30年 日本食品安全規格JFS-B規格のシステム認証を取得
- 令和 2年 創業100周年を迎える



代表取締役
小松 義幸

梁川通りの名物銭湯 100年の歴史を4代目が守る

創業

1922年

大正11年

柳川湯



浴室



北海道では珍しいとされる富士山の
タイル絵



初代店主 田中作次郎

市内中心部で長く営業

小樽駅から海側へ中央通りを下ると右手に都通り、左手が梁川通りですが、昔は都通りも梁川通りと呼ばれていました。「梁川」とは小樽の大地主であった榎本武揚の雅号が梁川（りょうせん）であったことにちなんで名付けられました。この梁川通りにある銭湯が柳川湯です。

初代・田中作次郎は、富山県から小樽へ出てきたと聞いています。私の曾祖父の代から、大正時代からの創業で100年の歴史がありますが、快適に入浴していただけるよう、改築も行い清掃には気をつけています。ジェットバスや気泡風呂もあり、日中は日差しが入り明るい浴場です。

大正を思わせる表の外観

大正時代から営業している銭湯は市内には当施設を含みもう3軒ほどしか残っていません。3代目の父が平成11年に建て替えるとき、正面外観は大正時代のままの風情を残しました。長橋、手宮方面には銭湯がなくなってしまったので、そちらのほうから駅前方面へ出かけるついでに寄ってくれるお客さんもいて、地域のみなさまに親し

まれております。

柳川湯

〒047-0032
小樽市稲穂3丁目16番16号
【TEL】0134-23-2271

●沿革

大正11年 初代・田中作次郎が稲穂町で銭湯開業
昭和47年頃 2代目武雄から3代目康弘に引き継ぐ
平成11年 建物建て替え
平成25年頃 康弘から4代目宏和が引き継ぐ
令和 4年 建物一部修繕。現在に至る



代表
田中 宏和

利用者の喜びを第一に 街で愛される公衆浴場

創業

1930年[※]

昭和5年

有限会社

神仏湯温泉



昭和40年代の神仏湯(昭和11年築)



温泉掘削時の新聞記事(昭和62年)



初代 大畑忠蔵

宮大工から銭湯経営へ

当温泉は明治の中頃よりあり、南小樽駅から近い双葉高校と生協南店の中間に位置しています。明治期は「如神湯」という銭湯で別の方が営業しておりました。宮大工として石川県から小樽へ渡ってきた初代・大畑忠蔵は昭和初期、縁がありその「如神湯」を譲り受け「住ノ江湯」として営業を開始。小樽で働く労働者の憩いの場を引き継ぎ守り続けていきました。また昭和11年には忠蔵の信仰心の厚さから「神仏湯」に改名し、その後2代目で法人化。昭和62年に当社敷地内にて地下1300mから当時小樽内で最も温度が高い59・2度の天然温泉の掘削に成功しました。平成元年に、現在の鉄骨3階建ての銭湯に建て直しました。

銭湯で体験できる源泉かけ流し

これまで、手頃な公衆浴場で100%かけ流しの源泉が楽しめる、小樽内外からのお客様にご愛顧を頂いております。泉質は低張性弱アルカリ性低温泉。神経痛、筋肉痛、関節痛などの症状軽減が期待されるほか、慢性消化器病・慢性便秘などに適応する飲泉もございます。また乾式サウナ、

水風呂、超音波浴槽も併設でリフレッシュには最適です。銭湯は月曜日休業ですが、家族風呂は正月を除き年中無休で営業しております。今後毎日来てくださるお客様に健康に貢献できるように、現在修行中の5代目へと引き継ぎ守り続けてまいります。

有限会社神仏湯温泉

〒047-0014
小樽市住ノ江1丁目5番1号
【TEL】0134-22-3893

●沿革

- 昭和5年 初代・大畑忠蔵が譲り受けた如神湯を住ノ江湯として営業を開始
- 昭和11年 神仏湯に改名。木造3階建ての銭湯を新築
- 昭和16年 2代目周蔵家督を相続
- 昭和40年 3代目昌三家督を相続
- 昭和62年 温泉掘削成功。(有)神仏湯温泉改名
- 平成元年 鉄筋3階建新築。家族風呂を始める



代表取締役
大畑 満眞

※事業承継前後の期間を合算することにより、営業の総年数が100年以上となることから、長寿企業として認定されました。

小樽が市制を施行した翌年の大正十二年、
小樽運河が竣工のときを迎えました。

まさに、小樽にとって

新時代の幕開けだったのです。



小樽市長寿企業表彰式

《日時》令和4年10月17日(月)18時 《於》ニュー三幸 小樽本店



式次第

表彰式

開会

市長挨拶

小樽市長 迫 俊哉

祝辞

小樽市議会議長 鈴木 喜明様

表彰

表彰企業御挨拶

ナトリ株式会社

代表取締役社長 生田 考様

記念写真撮影

記念祝賀会

開宴

乾杯

小樽商工会議所

会頭 山本 秀明様

閉会

小樽市副市長 小山 秀昭

表彰式



祝辞 小樽市議会議長 鈴木 喜明様



市長挨拶 小樽市長 迫 俊哉



表彰企業御挨拶 ナトリ株式会社 代表取締役社長 生田 考様



表彰式



記念品



記念品

記念祝賀会



開宴



乾杯 小樽商工会議所 会頭 山本 秀明様

記念祝賀会



記念祝賀会



閉会 小樽市副市長 小山 秀昭



明治初年の小樽港 手宮

小樽市 産業の歩み

序 章 はじめに

メルヘン交差点にある堺町郵便局の付近に、オタルナイ運上屋跡があります。江戸時代、ここでは場所請負をしていた岡田家が漁場を管理しており、漁期に雇の漁師を集めて漁を行ない、ニシン粕をはじめとする水産製品を作っていました。まさに小樽の産業事始めといつてよいでしょう。

小樽に和人が定住するようになって、まだ160年ほどしか経っていませんが、この町でかつて暮らした人々が、どのような稼ぎをして生きたのかちよつと覗いてみましょう。

第1章 近代産業のあけぼの 《明治初年から明治20年頃》

小樽商人の始まり

明治2年に新政府が開拓使を設けますが、札幌に本庁を建設して北海道のかなめとすることに決めたことから、小樽は札幌の外港と

して将来の発展が約束されることになりました。

また、商船の取り締まりや徴税を行う役所である海官所が置かれたことから、小樽港には直接、北前船などの商船の寄港が可能になりました。

小樽への寄港が増えると、江戸時代まで松前や江差など道南を拠点に大規模な漁業経営をしながら呉服・※荒物雑貨、海陸産物などの問屋を兼営していたような多くの裕福な商人が小樽へ移住して事業を行うようになります。

彼らは、漁場や周辺の村落で必要とした米、味噌醤油、清酒といった食料品や衣類などの生活必需品、さらに漁網などの漁業資材を本州各地から取り寄せて、供給しました。本州各地で高く売れるニシン粕や身欠き鯿、干数の子、塩鮭、塩鱒など漁業生産物を大々的に買い上げることで、莫大な利益を得て資産を蓄積し、小樽商人としての確固とした地歩を固めていくことになりました。

※荒物 ほうき、ざるなどの家庭で使う雑貨類

幌内鉄道と日本郵船

明治時代初期は、日本の国にとって蒸気機関が文明を象徴するものでした。開拓使は蒸気を生み出すエネルギー源である石炭産業の育成を進め、幌内炭鉱を開発しました。炭鉱から掘り出された石炭を運ぶための鉄道が明治15年、幌内（現三笠市）と小樽の間に結ばれ、小樽港で船積みされ本州へ運ばれるようになります。ここに大量の石炭を船に積み込むための石炭荷役が始まりました。

また、明治8年に、東京・函館・小樽間に開拓使付属船による定期航路が開設され、東京と小樽の間に情報・人流・物流のチャンネルが結ばれるようになります。さらに明治18年には、日本郵船小樽支店が発足し小樽でも支店営業を開始するなど、小樽港が汽船による海運の拠点になると、船荷の積み込みや積み下ろしのための艀業や仲仕業といった港湾荷役が台頭してきました。

石炭や貨物をついで運ぶ石炭・



明治30年代の小樽港 南濱町

港湾荷役は、機械化が進む以前は、多くの労働者が必要とした産業であり、物流の拠点だった小樽港では特徴的なものでした。

国が北海道への移民を進める中で、北海道の玄関口となった小樽には、多くの移民が上陸することになります。荷役作業が盛んだった小樽では、日銭を稼ぐことに事欠かず、経済的な成功を求めてきた人たちが当座の仕事として荷役作業に従事することも多かったと考えられます。北の誉酒造の創業者 野口喜一郎は、石川県から裸一貫で来樽した当時、石炭を運んで糊口を凌いだことが伝えられています。

小樽の人口は年々増加し、マーケットが拡大することになり、飲食、理美容、銭湯といった生活関連サービスや、生活必需品を扱う商売の増加にもつながっていくことになりました。

第2章 商圏の拡大

《明治20年代から明治末》

開拓の伸展と道内需要の拡大

北海道の開拓が進み、鉄道網が広がると、小樽の商圏は、内陸に向けてどんどん広がっていきました。

開拓地では、農機具はもちろん、住宅や納屋などを建設するための建築用金具、食料品をはじめとする生活必需品などの需要が高まり、港と鉄道の結節点だった小樽の街が、これらの供給元となります。

これらの必需品は小樽商人によって本州各地から集められたほか、小樽に現れた鉄工所や町工場などにより、金属製品、ランプなどのガラス製品等の製造、味噌、醤油、酒の醸造、菓子や餅などの食品製造、明かりの燃料としての魚油を作る製油など、製品は多岐に渡りました。

また、小樽に特徴的な産業として精米業がありました。米が育たなかった北海道では、玄米を本州

から移入し、精米工場で精米して道内各地へ供給していましたが、東北以北で最大の精米会社だった共成株式会社をはじめ、多くの精米会社があった小樽は、かつて精米業が基幹産業の一つでした。

さらに、衣類などの繊維販売業についても全道のほとんどのシェアを占め、小樽は一貫して、昭和戦後まで、大阪、名古屋、東京に次ぐ、全道一の実力を有する繊維問屋の街でした。

一方、森林の宝庫だった北海道では、三井物産が早くから木材を取扱い、盛んに造材を行なうなど輸出に主力を注いでおり、明治42年には札幌から小樽に支店を移しています。また、明治末にはゲルトネル商会といった世界的な木材貿易商も活躍するなど、多くの木材商が小樽に店を開き、木材が集散した小樽は木材の街としても隆盛を誇るようになります。明治40年に小樽に進出した新宮商行は、現在も広く木材製品などを扱う小樽を代表する企業です。

これら小樽に集まった膨大な物



大正時代 小樽運河

資の運搬は、主に馬車により行われ、明治後半の小樽は、千頭以上の馬が行き来する馬の街でもありました。しかし、自動車が使用され始めた大正初期以後、徐々に数を減らしていくこととなります。

馬車は客運も担っていましたが、大正10年に公共交通機関として小樽乗合自動車が発足しバスの時代を迎えました。これが現在、道内最大のバス会社である北海道中央バス株式会社のルーツになります。

また、小樽に集まった物資を保管するための倉庫業も発展してきました。

日露戦勝利と樺太の領有

明治37年から38年にかけて戦われた日露戦争で辛くも勝利した日本は、北緯50度以南の樺太（現サハリン）を領有しました。地理的に優位にあつた小樽港は、樺太との間に定期航路が結ばれ、樺太の物流基地となり、米や野菜、防寒着などの衣類、水産物を塩蔵するための食塩などが小樽から樺太へ

送られました。樺太の発展に伴い、さらに多くの人々が移住し生活するようになる昭和戦前までには、衣類をはじめ菓子やビール、和紙・紙製品、金属製品、煙草、石鹼・化粧品などを中心に、日常の生活必需品の供給のほとんどを小樽の業者の手を経て行っていたことから、大きな富が小樽の街に流れてくることになりました。

樺太で生産された木材は、小樽港から積取船で集荷しており、樺太材の基地となった小樽は、本州からも広く募集した積取人夫の供給地でした。一航海が10日から20日間で、実働が4日から5日間。5月から10月が稼働の季節で、海が凍る冬期は休業しました。彼らは仕事が無い時は、小樽に数多くあつた積取下宿に暮らしながら次の仕事を待つという生活を続けており、小樽に特有の職業でした。

第3章

北海道の心臓と呼ばれたまち 《大正から昭和初年》

空前の雑穀ブーム

北海道の開拓が進展し、安定してくると、農産物の生産量が増加していきました。中でも、数量の一番多い豆類と澱粉は、その80%以上を小樽の雑穀商や澱粉商が扱っていました。品質の良い北海道産の大豆や小豆は本州で人気があり、インゲン豆なども一般庶民の食材として愛用されていました。

そのような中、大正3年に勃発した第一次世界大戦では、戦場となったヨーロッパで、食料としての豆類や工業用澱粉が不足し輸出されました。ヨーロッパ、南米から、北海道産の豌豆、鶏豆、手亡豆、澱粉などに対する引き合いが急増したことによる、いわゆる「雑穀ブーム」がにわかに発生し、小樽の雑穀商や澱粉商は莫大な利益を手にするようになりました。

また、不揃いの豆粒や砕けた豆



昭和初年 銀行街

を一つ一つ選分ける豆選工場が、堺町や有幌町を中心に数多く整備され、最盛期の豆選女工の数は3600人に達したと言われています。

さらに雑穀ブームは、雑穀を収納する麻袋など包装資材の急激な高騰を引き起こすなど、周辺産業にも大きな影響を与えました。物流拠点だった小樽には、海陸産物などの梱包材の専門業者が活躍しましたが、当初は延(むしろ)や吠(かます)、麻袋などに始まり、その後、段ボールやプラスチックフィルム、発泡スチロールなど梱包材の材質を変えながら、現在も小樽の伝統として引き継がれています。

「雑穀ブーム」で活況を呈した雑穀商や澱粉商ですが、その後、第一次世界大戦後の不況期の中で急速に没落、停滞することになりました。

銀行街の形成

北海道の金融は、最初、主に漁業資金の融通のために始まったと

考えられますが、日清戦争後の好況によって国内では多くの企業が興り、経済的な賑わいを見せていた小樽にも銀行など金融機関の進出や設立が進みました。特に、明治33年に設立された北海道拓殖銀行では、北海道の農産物を担保とする貸付が行われたことから、農産物を扱う多くの小樽商人に利用されています。

日露戦争後には、さらに各種産業が発展し、資金需要が多くなったことから、小樽にも本州の銀行支店の進出が相次ぎました。日本銀行も明治39年に小樽出張所を支店に昇格させています。

さらに第一次世界大戦の影響によって移出や輸出が促進され、市況が活発化するにしたがって、金融界も隆盛を迎え、大正11年には小樽の銀行の数は20行に上り、小樽は北海道の金融の中心になります。

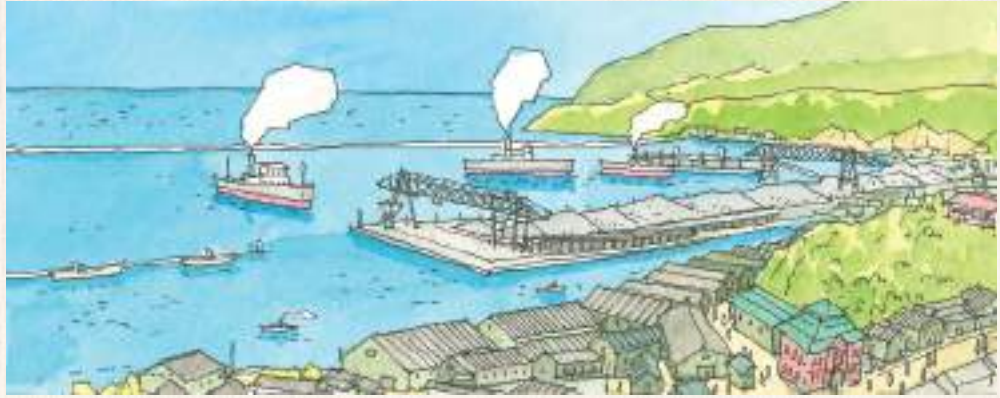
色内町には一大銀行街が形成され、「北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽」の、まさに心臓の役割を果たしていきます。

各種産業の隆盛

小樽の経済的な発展により、大正から昭和期にかけて各種産業が近代化を進めることになりました。なかでも食品加工業と金属・機械工業は、昭和期に入ると、小樽の工業を代表する二大業種として発展しました。

小樽には明治初年から、幌内鉄道の手宮工場における鉄道を基礎とした技術などの金属加工の伝統がありました。大正10年に設立された北海製罐倉庫(現北海製罐株式会社)の存在は際立っており、その周辺に各種の金属・機械工場が生まれています。これらの金属・機械工場の多くは中小企業ではありますが、それぞれ、鉱山用の機械などの主力製品を持ちつつ、多種多様な製品づくりを行っていました。その技術力は時代の変化にも対応できるものでした。現在でも、独自の技術による製品開発を行っている企業が稼働しています。

食品加工業では、中小の製菓業者やカマボコ製造を主とする水産



昭和30年代 築港石炭ロード

加工業者が多数存在していました。大正14年に日本製粉小樽工場が進出するなど、多様化も進みました。特に菓子製造は和洋の各種多様な菓子類を生産して「菓子の街」小樽にふさわしい地位を有し、小樽市内はもとより、道内、樺太へ供給していました。

その他、戦前昭和期には、ゴムの加工業が伸張しました。小樽のゴム工業は北海道における主要産業の一つとなり、現在も創意工夫を凝らした製品の開発など、活躍を続けています。

製紙業、製材・木製品工業なども比較的重要な位置を占めることになり、製紙業では、生活必需品であるチリ紙の製造で道内の大きなシェアを占めていました。

商業においては、昭和期に入ると、雑穀商などの投機的な取引に経営の基盤をおく商人層の多くがいなくなり、新たに三井、三菱、鈴木商店などの大商社と特約関係をもちつつ、食品、繊維製品、機械、雑貨などを専門的に取り扱う近代的な問屋商人層が、小樽商人の代

表となっていました。

第4章 戦時統制と戦後復興 《昭和戦前から昭和30年代》

戦時統制と戦後の経済活動の縮小

昭和12年の満州事変に始まる、いわゆる15年戦争の時代に入ると国家による統制経済が導入され、小樽の産業界は大きな打撃を受けることになりました。統制により販売する商品がなくなった小樽商人の多くが、休業や廃業に追い込まれ、さらに各種統制機関が札幌に置かれたことも小樽商人の経済活動の低下に追打ちをかけることになりました。

また、戦後についても、小樽に支店を構え、道内産業界を抑えていた三井、三菱と言った大商社の解体により、特約関係でつながっていた小樽商人は重大な打撃を受けました。

自由取引の再開と港湾整備

こうした経済の低迷を打開すべく、戦後、貿易などの自由取引が回復すると、小樽経済を支えてきた港湾物流の活性化を目指して、港湾施設の近代化が図られ、昭和25年に第2号ふ頭、昭和29年に第3号ふ頭が相次いで竣工しました。

小樽に集散する物資は、戦前に比べ内容は変わりましたが、数量では、昭和30年には昭和14、15年頃の最盛期に匹敵するようになり、大正11年との比較では約2倍に達していました。また、国際貿易が再開され、インチ材の輸出や米国などからの食糧の救済物資の受け入れなど、移出入、輸出入の貨物の大きな動きが明るい将来を示していました。

また、小樽港の主要な積み出し物資である石炭は、戦後も本州向けの移出が過去最高の量を記録していました。



昭和45年 フェリーすずらん丸初入港

第5章

斜陽の時代を乗り越えて

《昭和40年代から現在》

斜陽都市の始まり

しかし、戦後、日本の物流が太平洋側にシフトし、世界初の堀込式港湾として昭和38年に完成し、昭和41年に国際貿易港に指定された苫小牧港によって、小樽港の役割の低下は決定的になりました。

また、小樽港における石炭移出量が、戦後に過去最大を記録していましたが、国策として石炭から石油へのエネルギーの転換が図られ、さらに昭和55年には小樽港における石炭船積荷役が終了を迎えることになりました。

さらに、道内の農産物などは、産地業者による本州との直接取引やホクレンなどの勢力拡大による流通システムの大きな変化により、小樽の経済をささえてきた卸売商など小樽商人の手を離れ、衰退の道を歩んでいくことになりました。

銀行についても高度経済成長期

に入るとつぎつぎに小樽から撤退し、小樽を全道一にした金融的地位が失われてしまいました。

フェリーとコンテナ航路

このような中で、昭和45年に地元経済界の支援により、新日本海フェリー株式会社が発足し、日本初となる長距離フェリーを舞鶴港―小樽港間に就航させます。それまで冬の日本海の長距離フェリー運航は困難と言われていましたが、当時、世界最大のカーフェリーを新造し、日本海の荒波を克服することができたと言われています。北海道と関西地方を結ぶバイパスルートとしても注目され、現在もフェリー貨物は小樽港の取扱貨物量の大宗を担う不可欠の存在になっています。

また、平成14年には、神原汽船株式会社による中国との定期コンテナ貨物航路が、外貿定期航路としては22年ぶりに就航しました。

銭函工業団地と石狩湾新港

小樽市では戦後、経済振興策として企業誘致政策が議論されてきた中で、昭和50年代から60年代にかけて造成を行った銭函工業団地において企業誘致を進めてきました。現在、道内でも有数の工業集積地となり、食料品・機械・プラスチック・流通など、集積業種のバリエーションが豊富で、約130社の企業が操業しています。

また、道央の新たな流通と生産機能を分担する拠点港として小樽市と石狩市（当時は石狩町）にまたがって石狩湾新港が整備され、昭和57年に第一船が入港しました。石狩湾新港地域にも工業団地の造成・整備を促進し、積極的な企業誘致を進め、現在では、札幌圏最大の工業流通団地となっており、小樽地域の冷蔵倉庫群は、北海道内有数の保管能力を備えています。



現在の小樽運河

歴史的遺産を活用した観光産業

明治以来目覚ましく発展した、かつての商業的・金融的繁栄を物語る旧銀行街、旧問屋街、石造倉庫などの歴史的建造物は、小樽が高度経済成長期のスクラップアンドビルドの波に飲まれなかったことが幸いしてその多くが残ったと言われています。

一方で、市内交通渋滞緩和のために、昭和41年に決まった道道臨港線の整備によって埋立が予定されていた小樽運河ですが、市民によって行われた運河保存運動は、歴史的建造物に対する市民の認識を大きく変えたと考えられます。

また、運河保存運動が進めた歴史的町並み保存によるまちづくりの議論は、昭和58年の「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」制定につながりました。現在、多くの観光客が訪れるようになった小樽では、観光客をターゲットにした宿泊施設や飲食、物販施設などが整備され、観光産業が、小樽の主要産業の一つになっています。

終章

明治初年から増加が続いていた小樽の人口は、昭和39年に20万7千人のピークを迎えた後は、昭和40年から現在まで減少が続いています。

かつて、開拓による道内経済の拡大や戦争による国土の拡大そして人口の拡大の中で、小樽は地の利、時の利に恵まれ経済の繁栄を享受してきました。

今、人口が10万人になり、小樽の経済繁栄の黄金期とも言える100年前と社会情勢が全く変わってしまった中で、この街で生きていくため、この機会に改めて考えてみてはいかがでしょうか。

■原稿執筆・イラスト…

笹原 馨（小樽商工会議所）

■協力…小樽市総合博物館

■参考文献

- ・『小樽市史第三巻』（小樽市、1964年12月1日）
- ・『小樽市史第五巻』（小樽市、1967年3月31日）
- ・「戦前期における小樽の経済的発展」（井上 巽、『北海道経済』1978年9月）
- ・『小樽の労働者の伝統』（琴坂守尚、『北海道経済』1978年9月）
- ・『観光資源調査報告VOL・7 小樽運河と石造倉庫群』（財団法人観光資源保護財団、1979年3月）
- ・『小樽繊維製品卸商同業会結成満15周年記念誌〈小樽の織維〉』（小樽繊維製品卸商同業会、1965年12月1日）
- ・「オタル新地図 織維問屋街」（北海道新聞記事、1951年10月2日）
- ・『小樽鉄工組合創立60周年記念誌「匠」』（小樽鉄工組合、2022年11月26日）
- ・『小樽ものづくりの原動力「プラスチック・ゴム関連」』（小樽市、2009年11月）
- ・『共成製薬50年のあゆみ』（共成製薬株式会社、2006年10月）

小樽の産業史 年表

年		事 項	
明治 2	1869	蝦夷地を北海道に改称。 開拓使は手宮、函館、幌泉（襟裳）、寿都に海官所を設置（翌年「海関所」に改称）。	
明治 5	1872	開拓使、手宮の港を小樽港と改称。 函館～室蘭～札幌～小樽の郵便が開業。	
明治 7	1874	札幌～小樽で電信線開通。	
明治 8	1875	小樽で公衆電報の取扱い開始。 東京～函館～小樽に開拓使附属船の定期航路開設。	
明治 11	1878	〈函館税関小樽出張所〉を色内に設置。	
明治 13	1880	〈幌内鉄道〉手宮～札幌間が開通。	
明治 15	1882	〈幌内鉄道〉手宮～幌内間が全通。幌内炭鉱からの石炭輸送始まる。	
明治 18	1885	〈日本郵船〉が発足。小樽でも支店営業開始。	
明治 19	1886	〈函館税関小樽出張所〉を再設置。	
明治 20	1887	出港税が廃止され、国内貨物の移出入が活発化する。	
明治 22	1889	小樽港が特別輸出港に指定される。	
明治 25	1892	南濱町と入船町地先に船入潤が完成。	
明治 26	1893	〈日本銀行小樽派出所〉稲穂町に設置。	
明治 27	1894	小樽港が特別貿易港に指定される。 露領沿海州、サハリン及び朝鮮との貿易が許可される。	日清戦争
明治 28	1895	〈小樽電燈舎〉開業、市街で電力供給開始。 〈小樽商業会議所〉設立許可下りる。	
明治 30	1897	小樽築港第一期修築工事（北防波堤）着工。 南濱町に移民休憩所設置。	
明治 32	1899	小樽港が外国貿易港に指定される（開港）。 小樽は区制施行。小樽郡、高島郡下38町村を統合して〈小樽区〉が誕生。	
明治 33	1900	小樽区内で電話が開通（5月には小樽～札幌間も）。	
明治 37	1904	〈北海道鉄道〉函館～小樽が全通。	日露戦争
明治 38	1905	〈北海道鉄道〉は〈北海道炭鉱鉄道〉（〈幌内鉄道〉改め）との連絡線を開業。 函館～札幌方面の直通運転が可能となる。	
明治 39	1906	〈北海道炭鉱鉄道〉の鉄道路線が国有化される。 〈日本郵船小樽支店〉で日露代表による樺太の国境画定会議開催。	
明治 40	1907	〈北海道鉄道〉（函館～小樽）が国有化される。	

小樽の産業史 年表

協力：小樽市総合博物館

年		事 項	
明治 41	1908	小樽築港第一期修築工事（北防波堤）の竣工。 小樽築港第二期修築工事（南防波堤、島防波堤）の着工。	第一次世界大戦
明治 44	1911	〈手宮高架栈橋〉竣工。	
大正 3	1914	小樽区第一期埋立て工事の着工。 上水道竣工、通水開始。 小樽港が植物防疫港に指定される。	
大正 7	1918		
大正 10	1921	〈小樽乗合自動車〉が区内4路線でのバス運行事業を開始。 北浜町埋立て地に〈北海製罐倉庫〉設立。	
大正 11	1922	小樽区は市制施行。〈小樽市〉となる。	
大正 12	1923	小樽港埋立てが完工。小樽運河が全区間完成。	
昭和 14	1925	〈日本製粉(株)小樽工場〉開設。	
昭和 元	1926	潮見台町に〈ロシア領事館〉開設。	
昭和 2	1927	市営第二期港湾修築工事（有幌町埋立）の着工。	
昭和 3	1928	小樽商業会議所は〈小樽商工会議所〉に改称。	15年戦争
昭和 6	1931	〈小樽海港博覧会〉の開催。 満州事変。	
昭和 7	1932	市営第二期港湾修築工事の竣工。 鉄道省小樽臨港線（小樽築港～浜小樽）開業。	
昭和 12	1937	〈北海道大博覧会〉の開会（8月25日まで）。	
昭和 15	1940	第1号ふ頭完成。 高島町及び朝里村を小樽市に編入。	
昭和 20	1945	終戦。	
昭和 24	1949	色内に〈北海道貿易館〉開館（昭和45年閉館）。	
昭和 25	1950	第2号ふ頭完成。	
昭和 26	1951	小樽港が重要港湾に指定される。	
昭和 27	1952	サンフランシスコ平和条約締結。	
昭和 29	1954	朝里温泉（現朝里川温泉）で初の温泉宿泊施設〈元湯朝里温泉〉開業。 第3号ふ頭一期工事完成。	朝鮮戦争
昭和 30	1955		
昭和 31	1956	〈小樽市産業会館〉開館。	

年		事 項	
昭和 33	1958	塩谷村を小樽市に編入。 〈北海道大博覧会〉開会。札幌との共催で小樽では第3号ふ頭と祝津が会場。	高度経済成長期
昭和 36	1961	〈小樽市商工会館〉開館。	
昭和 38	1963	若竹町に木材荷さばき施設が完成。	
昭和 39	1964	小樽市の人口ピーク(9月207,093人)。 小樽市が新産業都市に指定される。	
昭和 41	1966	小樽港が動物検疫港に指定される。 道道小樽臨港線整備が都市計画決定される。	
昭和 42	1967	第3号ふ頭延長工事完成。	
昭和 45	1970	〈新日本海フェリー〉小樽～敦賀～舞鶴間に長距離フェリー就航。	
昭和 46	1971	若竹貯木場完成。 〈小樽自動車道〉小樽インターチェンジ～札幌西インターチェンジ間が開通。	
昭和 47	1972	中央ふ頭完成。	
昭和 48	1973	〈小樽駅前再開発事業〉が始まる(昭和51年完成)。	
昭和 53	1978	第1回〈ポートフェスティバル〉開催。	
昭和 54	1979	勝納ふ頭フェリーターミナル完成。 色内ふ頭完成。	
昭和 55	1980	小樽港における石炭船積荷役の終了。 苫小牧東港区開港。	
昭和 56	1981	勝納ふ頭落成。	
昭和 57	1982	石狩湾新港に第1船入港。	
昭和 58	1983	「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」の制定。	
昭和 60	1985	国鉄手宮線の営業が終了、廃線になる。	
昭和 61	1986	道道臨港線と運河散策路の工事終了。	
平成 62	1987	国鉄分割民営化で〈JR北海道〉発足。	
平成 2	1990	〈小樽市観光物産プラザ〉(運河プラザ)開館。 〈小樽港マリーナ〉開業。	
平成 11	1999	築港地区に〈マイカル小樽〉開業。	
平成 13	2001	国道5号札幌～小樽間、全線4車線化が完工。 旧手宮線跡地を遊歩道として整備(寿司屋通り～中央通り)。	
平成 14	2002	〈日本銀行小樽支店〉が営業終了。 市内で最後の都市銀行〈三井住友銀行小樽支店〉が営業終了。	

小樽の産業史 年表

協力：小樽市総合博物館

年		事 項	
平成 14	2002	小樽～中国定期コンテナ航路開設。	
平成 17	2005	百貨店〈丸井今井小樽店〉が閉店。	
平成 21	2009	新駅前第三ビル〈サンビルスクエア〉オープン。	
平成 23	2011	小樽港が日本海側拠点港（外航クルーズ）に選定される。	
平成 28	2016	〈旧手宮線跡散策路〉 寿司屋通り～手宮までの全区間が開通。	
平成 29	2017	〈小樽芸術村〉がグランドオープン。	
平成 30	2018	〈後志自動車道〉小樽ジャンクション～余市インターチェンジ間が開通。	
令和 2	2020		新型コロナウイルスの世界的流行
令和 3	2021	〈北海製罐小樽工場第3倉庫〉が市へ無償譲渡される。	
令和 4	2022	小樽市、市制施行100周年記念式典を開催。	

※令和 13 (2031) 年 北海道新幹線札幌延伸





2023 (令和5) 年に竣工100周年を迎えた小樽運河〈1923 (大正12) 年竣工〉 写真: 志佐 公道

小樽市長寿企業表彰事業記念誌

発行日 2023 (令和5) 年2月

発行 小樽市長寿企業表彰事業実行委員会

〒047-8660 小樽市花園2丁目12番1号 小樽市産業港湾部産業振興課内

TEL 0134-32-4111 (内線263・264)

企画・デザイン・編集・印刷: 株式会社オー・プラン

撮影 (企業外観): 志佐 公道

An aerial photograph of a city at dusk. The sky is a mix of soft pinks, purples, and blues. In the background, a range of mountains is silhouetted against the horizon. The middle ground shows a large body of water, likely a bay or harbor, with several long piers extending into it. The foreground is a dense urban area with many buildings, some of which are illuminated with lights. The overall mood is serene and peaceful.

小樽市長寿企業表彰事業記念誌